

熊本県立装飾古墳館

研 究 紀 要

第 15 集

-
- ・ 白鳥平 A 遺跡VI層石器群の再評価…………… 1
装飾古墳館 村崎孝宏
 - ・ 石棺系装飾古墳について一考察…………… 9
装飾古墳館 坂口圭太郎・村上光治・菊川知美
 - ・ 鞠智城跡の東側で確認された版築・積土と列石…………… 13
鞠智城・温故創生館 岡本真也
 - ・ 鞠智城跡内に残存する地名…………… 21
鞠智城・温故創生館 岡本真也
 - ・ 鞠智城跡内に残存する西南戦争時の台場跡…………… 24
鞠智城・温故創生館 岡本真也
 - ・ バケツを使用した古代米栽培の試み…………… 29
装飾古墳館 牛島克彦

2022・3・31

研 究 紀 要

第 15 集

2022・3・31

熊本県立装飾古墳館

目次

目次

白鳥平 A 遺跡VI層石器群の再評価	1
装飾古墳館 村崎孝宏	
石棺系装飾古墳について一考察	9
装飾古墳館 坂口圭太郎・村上光治・菊川知美	
鞠智城跡の東側で確認された版築・積土と列石	13
鞠智城・温故創生館 岡本真也	
鞠智城跡内に残存する地名	21
鞠智城・温故創生館 岡本真也	
鞠智城跡内に残存する西南戦争時の台場跡	24
鞠智城・温故創生館 岡本真也	
バケツを使用した古代米栽培の試み	29
装飾古墳館 牛島克彦	

白鳥平 A 遺跡VI層石器群の再評価

装飾古墳館 村崎 孝宏

1. はじめに

令和3年度第16回古墳館・菊文研講座において「文化財保護を振り返る-発掘調査、遺跡から学んだこと-」をテーマに話す機会をいただいた。そこで、これまで筆者が文化財行政で関わった多くの遺跡の中で「城・馬場遺跡第2地点」や「白鳥平 A 遺跡」、「白鳥平 B 遺跡」の発掘調査について振り返る機会を得た。それぞれの遺跡についての調査成果は、既に報告書にまとめ公表している(熊本県教育委員会 1991、1993、1994)。奈良文化財研究所の「全国遺跡総覧」で検索できるので、興味のある方は参照いただきたい。

今回、報告書を読み直し発掘調査成果を改めて振り返ったことで、当時筆者の勉強不足から石器群の理解と評価が十分でなかった点に気づかされた。特に、石材に関する観察や理解が十分でなかった点など気になる点が少なくない。「遺跡」を理解するには出土した石器群から得られる情報を客観的に記録することが必要であり、それが地域研究の重要な基礎資料となる。なかでも「石材」と「技術」は、当時の人びとの行動範囲や遊動領域、集団間の関係性から地域性、文化圏など空間的広がりや時間的変遷を考えるうえで重要である。利用される石材が「どこで採取され」、「どのように利用され」たか、あるいは「どのようにして」、「どのような形で」遺跡に持ち込まれたのか。また、「どのような技術で石器に加工されたのか」、「石器」から読み取れる情報は案外多い。また、遺物の出土状態やまとまり、遺構との関わりなど遺跡から学ぶことはさらに多い。

そこで、今回はかつて筆者の力量不足から、石材に関する観察や理解が十分でなかった点など、今日的視点から遺物を見直し、遺跡から出土した石器群を正しく理解し評価することを目的とする。石材に係る情報を整理することで、行動領域や地域間の交流と関係性等の理解につながることを期待する。

2. 遺跡の概要

1) 遺跡の位置と環境

白鳥平 A 遺跡は 1990～1991 年に九州縦貫自動車道(人吉-えびの)の建設工事に伴い発掘調査が実施された。遺跡は、人吉市赤池水無町に所在し、球磨川の支流人我胸川の左岸丘陵に立地する。丘陵の基盤層は入戸火砕流(シラス)で、標高 187～189m を測る。該地は、加久藤～大口にかけて三県を画する山地から連なる丘陵で、胸川や人我胸川、鳩胸川によって開析されたそれぞれの谷に挟まれている。遺跡は南方の山地から徐々に低くなりながら連なる丘陵の突端に位置する。東側を流れる人我胸川との比高差は約40mを測り、北側に人吉市街地を望む。遺跡はこの丘陵のほぼ全面に形成される。最高所は遺跡のほぼ中央に位置し、入戸火砕流(シラス)が露出する。この最高所から周囲に向かって緩やかに傾斜するが北及び西側、南西側では谷に

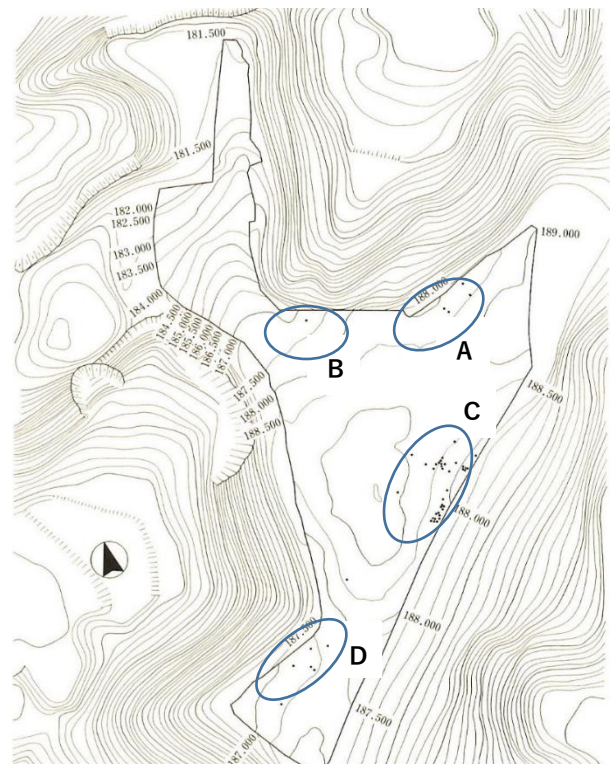


図1 遺物分布図

向かって急峻な崖地形となる(図1)。

2) 層位と包含層

当該遺跡では始良カルデラ起源の入戸火砕流(シラス)をVII層として7枚に分層できる(図2)。III層には鬼界カルデラ起源のアカホヤ火山灰の一次堆積層(b)と二次堆積層(a)が確認される。IV層は暗褐色土、V層は黒褐色土で、上層から下層にいくに従って粘性を帯び締まりが強くなる。また、V層中にはガチガチに固まった黒色のブロックを多量に含んでいる。VI層は褐色土で、基盤層の入戸火砕流(シラス)が土壌化し二次的に堆積した層と考えられる。VII層は基盤層である入戸火砕流(シラス)で、土色と土質の違いから a, b 層に細分できる。VIIa 層は粒子が粗くザラザラとした黄色火山灰である。同様の土層が狸谷遺跡で確認されており、入戸火砕流の二次的堆積層と考えられる。VIIb層は灰白色土層で入戸火砕流(シラス)である。このVIIa 層、VIIb 層とも無遺物層である。

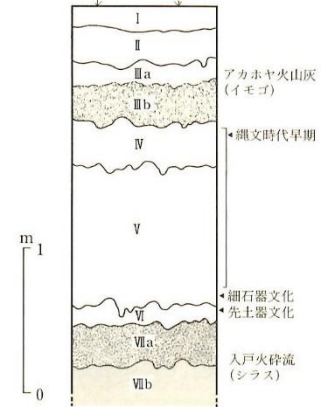


図2 基本土層図

当該遺跡では、IV～V層上半にかけて縄文時代早期の遺構、遺物が検出され、V層下半に細石刃石器群が出土する。旧石器時代石器群はAT層上位のVI層を中心に出土し、その総数は70点である。今回は報告書で図示した39点を対象に検討を行なった(表1)。

3) 石器群の分布と組成

石器群の分布は全域に及ぶが、大きくは北東部(A群)と北側(B群)、東側緩斜面(C群)、南側の西側緩斜面(D群)の4つのまとまりに区分できる(図1)。これらの石器群は前述したとおりAT層上位のVI層を中心に出土し、その総数は70点である。

① A群

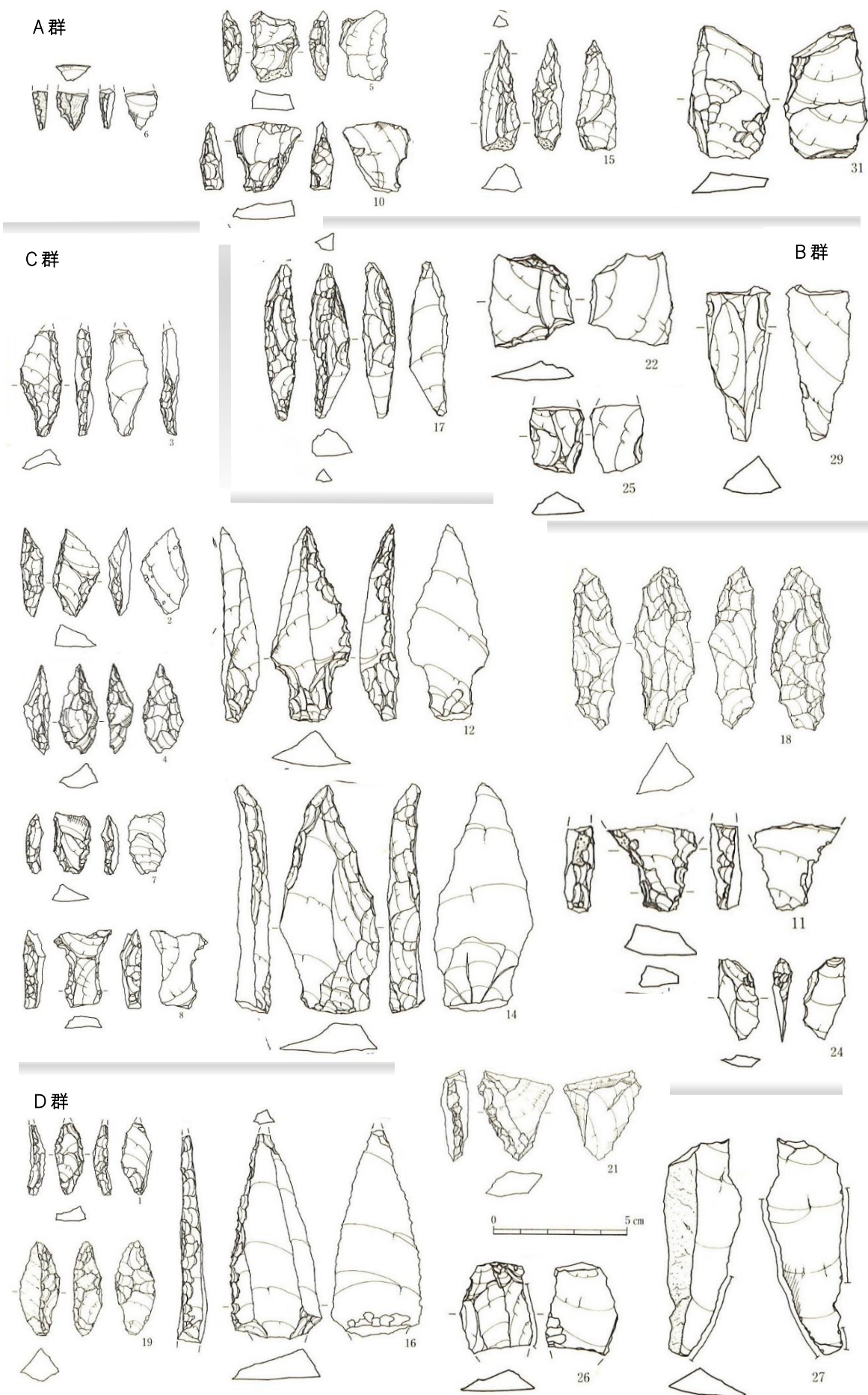
A群は丘陵北端に所在し、後世の崖崩落等も考えられ完全な組成を示すものではないことが予想される。図示された資料はナイフ形石器1点、台形石器2点、角錐状石器1点と剥片1点である。剥片以外はすべて黒曜石であり、石質及び色調から桑ノ木津留産と黒色で白色粒を夾雑物に含む白浜林道系かもしくは日東系の2種類に分類される。淡灰色を呈する流紋岩は剥片のみで、同群内に製品は見られない。台形石器(10)は、幅広剥片を素材に打面を表面側からの調整剥離によって除去し直線的に作り出し、その面から表面側へ僅かに平坦剥離調整を加える。左側縁基部側の抉入状の調整加工が浅いものの石器製作の作業工程は原の辻型台形石器と同様の技術と判断できる。石材は桑ノ木津留産黒曜石を利用する。

② B群

B群は丘陵北側谷部の谷頭に所在し、A群の西側に位置する。図示された資料はナイフ形石器1点、角錐状石器1点、二次加工ある剥片2点、使用痕ある剥片2点、剥片1点である。ナイフ形石器は、右側縁基部よりに1回の剥離で抉入状の形状を作り出す外、二次加工は認められない。打面を残置し、表面左側に求心的剥離がみられることから小型の剥片尖頭器の未完成品と考えられる。この資料を除けば残りすべてが非黒曜石で、その内訳は角錐状石器を含む流紋岩2点、サヌカイト2点、安山岩1点、凝灰岩1点である。

③ C群

C群は丘陵最高所から東へ緩やかに傾斜する地点に分布する。器種・石材ともボリューム、バリエーションが豊富で、図示された資料はナイフ形石器3点、台形石器2点、剥片尖頭器3点(中原型ナイフ形石器を含む)、角錐状石器1点、二次加工ある剥片2点、剥片・石核各1点ずつである。石材では黒曜石6点(桑ノ木津留産3点、日東系2点、上牛鼻産1点)、流紋岩6点、凝灰岩質安山岩1点である。ナイフ形石器や台形石器、それぞれごとで形態的に共通性は見いだしにくい。



第3図 白鳥平A遺跡A~D群石器群

表1. A～D群の石材組成

群	計	黒曜石			チャート		安山岩			流紋岩		黒色硬質頁岩
		桑ノ木津留系	日東系	上牛鼻産	黒色～暗灰色	灰白色	サスカイト質	凝灰岩質	その他	A類(暗灰色)	B類(灰色)	
A群	5	2	2			1						
B群	7		1				2	1	1	1	1	
C群	13	3	2	1		3	1	1		1	1	
D群	12				2	2					3	5
その他	2				1					1		
計	39	5	5	1	3	6	3	2	1	3	5	5

表2. A～D群の石器組成

群	計	ナイフ形石器	台形石器	剥片尖頭器	角錐状石器	掻器	削器	形器	二次加工ある剥片	使用痕ある剥片	石核	剥片
B群	7				1				3	2		1
C群	13	3	2	3	1				2		1	1
D群	12	1	1	1	1		1			3		4
その他	2							1				1
計	39	5	5	4	4		1	1	5	5	1	8

しかし、桑ノ木津留産黒曜石を用いたナイフ形石器(2)と台形石器(8)は、表面に残された剥離面から求心的な剥離が看取される点で共通する。そこで得られた剥片の形状は幅広もしくは横広の剥片であり、製作される石器の目的剥片のイメージと深くかかわるものと予想される。台形石器(8)は打面を裏面側から除去し、対辺の刃部付近から基部に向けて抉入状の調整加工を施しており、結果的に刃部左右が角状に突起した形状をなす。打面部の調整剥離の方向などいくつかの技術的差異はあるものの大まかには原の辻型台形石器に技術的類縁性が求められる資料であろう。また、ナイフ形石器(4)はやや甲高な剥片を素材として利用することと、裏面側に平坦剥離を多用する点などの技術的特徴を有する。白鳥平 B 遺跡の上牛鼻産黒曜石を用いた小型角錐状石器に類例が認められる。

④ D群

D群は丘陵南端に位置し、最高所からの緩傾斜が鞍部で溢れる地点の南側に分布する。器種組成はバリエーションが豊富で、図示された資料は小型のナイフ形石器1点、台形石器1点、剥片尖頭器1点、小型の角錐状石器1点、スクレイパー1点、使用痕ある剥片2点、剥片4点である。石材では流紋岩が6点、黒色硬質頁岩4点、チャート2点で黒曜石を組成しない。

4) 石材利用の在り方

当該遺跡の石材利用では、黒曜石が全体の 57.1%を占める。肉眼観察による分類から夾雑物をほとんど含まず透明感のある飴色をした黒曜石(桑ノ木津留系)、黒色で白色粒の夾雑物を多く含む黒曜石(日東系)、透明感がなく艶のない黒色を呈する黒曜石(上牛鼻産)に大別される。ただし、白色粒の夾雑物を多く含む黒曜石については白浜林道産の可能性もあるが、肉眼観察の限界からここでは日東、五女木、狸々とともに「日東系」とした。

当該遺跡から黒曜石原産地までの距離は桑ノ木津留が約10km、白浜林道が約20km、日東・五女木が約30kmの位置にあり(図4)、最も遠い上牛鼻が約50kmの距離である。

非黒曜石の利用は全体の42.9%を占め、報告書で珪岩としたものは27.1%である。この種の石材については当初、狸谷1石器文化でみられる「表面が白色に風化し、表面に流理構造が認められる石材」と同質と判断し分類を行った。しかし、石質と色調にバリエーションがみられることから、改めてA、B類に分類を行った(表1)。

A類は暗灰色を呈し流理構造がみられる。この種の石材は剥片尖頭器(12)と角錐状石器(17)のみに利用される。灰色を呈するB類は、C群とD群にまとまる。黒色硬質頁岩はD群にのみ確認される。当該石器群の特徴として「臼杵-八代構造帯」沿いにみられるチャートの利用は少ないが、表面が風化して灰白色を呈する石材を含む点は留意が必要で、北中島西原遺跡で類似した石材が出土している。この石材は流紋岩B類と同じくC群とD群にまとまって出土する。

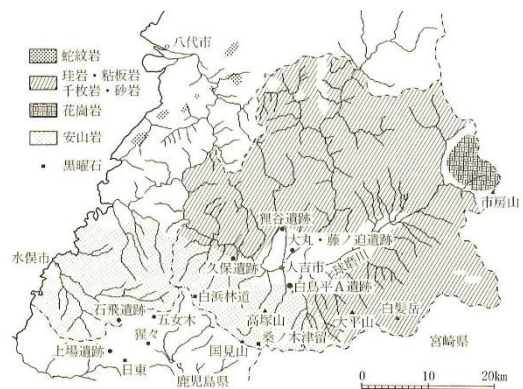


図4 球磨川流域の石材分布

3. 石器群の石材利用と行動領域

先述したとおり白鳥平 A 遺跡の石材利用には、いくつか特筆すべき点が看取される。1つ目は、在地産石材であるチャートの利用が少ない点である。2つ目は、上牛鼻産黒曜石の利用がみられる点である。台形石器1点のみの出土であり製品として搬入された可能性が高い。その他の黒曜石では桑ノ木津留系と日東系が拮抗し、遺跡からおおよそ10～30km圏内にある。つまり、黒曜石の利用にあつては比較的遺跡周辺の石材を選択的に獲得しているといえる。3つ目は、流紋岩の利用が多い点も特徴としてあげられる。この種の石材は色調や石質の違いから大まかに A、B 類に細分が可能である。それぞれの分布は、A 類が B、C 群、B 類が C、D 群にまとまる傾向が看取でき、組成には剥片類も含むことから、遺跡への搬入が製品の上牛鼻産黒曜石の在り方とは異なる。また、当該石器群の石材利用は黒曜石類と流紋岩を含む非黒曜石類が拮抗した様相を呈することが看取できる。黒曜石のうち白色の夾雑物を含む石材については、白浜林道や日東、五女木、猩々が原産地として考えられるが前述したとおり肉眼観察での分類は困難であり、「日東系」として一括した。このことを考慮に入れても一定量の日東、五女木、猩々産黒曜石を含むものと理解でき、上牛鼻産黒曜石の搬入と合わせて南九州方面を行動領域の一端に持つことが予想されよう。また、流紋岩には剥片尖頭器や角錐状石器と剥片類を含んでおり、遺跡への搬入が製品単体でない可能性を示唆するものであろうか。

4. 人吉球磨地域における AT 上位石器群の石材利用と行動領域の推定

白鳥平 A 遺跡でみられた石材のうち上牛鼻産を含めた黒曜石や流紋岩などの利用について人吉球磨地域の遺跡について概観する。今回は、実際に遺物を確認できた遺跡を対象として取り扱った。そのため、遺跡数が限定され情報に偏りが予測されるが、大まかな傾向は示せるものと考ええる。

上牛鼻産黒曜石を含む石器群は白鳥平 B 遺跡と天道ヶ尾遺跡で確認される。特に白鳥平 B 遺跡では黒曜石の65%を上牛鼻産黒曜石が占め、小型のナイフ形石器や台形石器、角錐状石器に利用される。また、この種の小型角錐状石器は天道ヶ尾遺跡第3凹部にも認められる。また、白鳥平 A 遺跡 C 群では比較的厚みのある剥片を素材とした桑の木津留産黒曜石製のナイフ形石器(4)が出土する。この石器は、右側縁に急斜な調整加工を施すことで先端を尖らせ、腹面に平坦剥離を施しており、左上半部に刃部が想定できることからナイフ形石器に分類したが、白鳥平 B 遺跡の上牛鼻産黒曜石製小型角錐状石器と技術的、形態的に類似した特徴を示す。このことは、上牛鼻産黒曜石を多用する集団の持つ技術が在地産石材に置換され製作された可能性を示すものであろうか。白鳥平 B 遺跡石器群は日東、五女木、猩々などの黒曜石原産地を移動経路に取り込み、上牛鼻産黒曜石原産地周辺までを行動領域に持つものと理解される。

当該地域には白鳥平 B 遺跡を除き一定量の流紋岩を組成する鼓ヶ峰遺跡、天道ヶ尾遺跡、石清水遺跡などの遺跡が認められる。天道ヶ尾遺跡では、ナイフ形石器や剥片尖頭器、角錐状石器に用いられ、第3凹部に流紋岩製の打面を残す刃器状剥片を素材に用いた一側縁加工ナイフ形石器が組成している。第1凹部・第2凹部の中間に同様の剥片を素材とするナイフ形石器が報告されているが、調整加工が左側縁部基部よりに鋸歯状に施され、左側縁上部に想定される刃部角が55～60度と急斜であることからナイフ形石器ではなく削器に分類することが妥当であろう。石清水遺跡でみられる刃器状剥片を用いた特徴的な「石清水型削器」と素材剥片の形状や扱い、調整加工の在り方など技術的形態的特徴が類似する。この種の石器は宮ヶ迫遺跡(鹿児島県)において「縦長剥片の縁辺に鋸歯状の剥離を施す」特徴的な削器として型式設定され(桑波田 2000)、宮崎県内に類例がみられることが指摘されている(桑波田 2004)。このような遺物の分布は、南九州～東九州と当該地域との関係性を示すものであろう。

また、この石清水型削器は、石清水遺跡や宮ヶ迫遺跡で確認されたように剥片尖頭器石器群との結びつきが強

表3. 人吉球磨地域のAT上位の旧石器時代遺跡石器・石材組成表

遺跡	計	黒曜石					計	チャート			計	安山岩			計	流紋岩		計	黒色 頁岩
		桑ノ木 津留系	日東系	上牛鼻産	その他	青灰～ 黒灰色		淡灰色	サスカ イト質	凝灰 岩質		その他	A類 (暗灰色)	B類 (灰色)					
鼓ヶ峰	41	2	1	0	1	4	24	0	24				0	2	2	4	2		
白鳥平B	47	2	3	13	2	20	20		20	2	1	2	5			0	2		
天道ヶ尾	第1凹部	31	9	1	2	12	9	1	10		1	1	2		2	3	5		
	第2凹部	9	1			1	6		6				0			0	2		
	第3凹部	15			1	1	11	1	12		1		1			1	1		
	第4ブロック	28	2	3		5	19		19				0	1	1	2	2		
	第1,2凹部 の中間	8				0	2		2		2		2		2	2	2		
石清水	192	2	1			3	135	24	159		4	2	6	13	4	17	7		

く、同様の剥片剥離技術システムにより生産され、打面を残したまま利用する素材扱いも共通する。石清水型削器を伴う天道ヶ尾遺跡第1凹部、第2凹部の中間の剥片尖頭器は、打面と石器主軸が直行せずやや斜めにズれるものが多く、求心的に剥離された素材剥片も幅広の形状を示す。中には茎部の作り出しが不明瞭な所謂「中原型ナイフ形石器」に分類可能なものも含まれる。宮ヶ迫遺跡の剥片尖頭器は器長に比べて幅広の剥片素材を用いたものや、打面と石器主軸が直行せずやや斜めにズれるものがみられる。石清水遺跡では凝灰岩質安山岩を用い、表面がザラザラし稜が潰れた特徴を示しており茎部の作り出しは弱い。石清水型削器が在地のチャートを用いた剥片生産を行っている点から凝灰岩質安山岩製の剥片尖頭器は搬入品であると考えられる。

鼓ヶ峰遺跡の中原型ナイフ形石器は、緑川流域でみられる緑色チャートが用いられ、製品として搬入されたものである可能性が高い。このように特定の地域でみられる特徴的な石材の利用は、当時の遊動領域、移動のルートを考えるうえで重要である。川辺川流域の野々脇遺跡でナイフ形石器が出土し、未報告であるが標高約970mの九州脊梁山地に立地する五木村の平沢津遺跡では流紋岩を多用する石器群が検出されており、確認されている遺跡は少ないものの川辺川を遡り人吉球磨地域から緑川流域や阿蘇南外輪、東九州へ移動するルートが存在する可能性が指摘できようか。また、このことは縄文時代早期初頭においても頭地田口A遺跡で前平式土器岩本タイプが出土することから、五木谷を経由した南九州方面へのルートが存在している点を示す事例として興味深い。

5 石器群の時間的位置付け

白鳥平A遺跡について人吉球磨地域の遺跡との比較から当該石器群の時間的位置づけを検討したい。

九州における旧石器時代石器群の編年研究では、AT上位のナイフ形石器群をⅢ、Ⅳ期とし、剥片尖頭器や角錐状石器を組成する段階をⅢ期に位置付け、さらに、当該期を初頭、前半、後半の3時期に細分する(木崎 1988、1994)。木崎氏は人吉球磨地域のAT上位石器群についてⅢ期前半に狸谷Ⅱ石器文化、大丸藤ノ迫石器文化、天道ヶ尾石器文化、石清水石器文化を、後半に鼓ヶ峰石器文化を位置付ける(木崎 前掲)。ここで前半と後半を画するものとして剥片尖頭器の有無をあげている。確かに、当該期石器群はナイフ形石器や台形石器、剥片尖頭器、角錐状石器に搔・削器など豊富な器種組成を示すことが知られ、また、ナイフ形石器の形態組成も基部加工や斜軸形、切外型、打面を残す二側縁加工など多様である。

Ⅲ期前半初頭に位置付けられる狸谷型ナイフ形石器を出土した駒方津室迫では、搔・削器を伴う単純な石器組成を示すことが報告され(大野町教委 1992)、また、同様の石器群が仁田尾遺跡でも確認されている(鹿児島県立

表4. 人吉球磨地域の旧石器時代遺跡の石器組成

遺跡名	剥片 尖頭器	ナイフ形石器						台形(様)石器			角錐状 石器	搔・削器	彫器	石錐	楔形 石器	磨石 敲石
		狸谷型	今峠型	国府型	二側縁加工	基部加工	その他	原の辻型	百花台型	その他						
石清水遺跡	○				○		○					○				
鼓ヶ峰遺跡	○	○?		○			○	○?			○	○				
天道ヶ尾遺跡	第1凹部	○			○?				○	○						○
	第2凹部									○						○
	第3凹部	○			○		○			○	○					
	第4ブロック						○			○						○
	第1凹部と 第2凹部の 中間	○					○				○					○
	集中部外		○													
白鳥平A遺跡	A群						○	○		○	○					
	B群								○?	○						
	C群	○			○					○	○					
	D群	○					○			○	○					
	集中部外											○				
白鳥平B遺跡	北①						○		○?	○	○	○				
	北②					○	○						○			○
	南						○				○					○
	集中部外	○						○?								
大丸・藤ノ迫遺跡	○					○	○		○	○	○	○				○
狸谷遺跡Ⅱ石器文化	○	○					○	○		○	○	○	○		○	○

埋蔵文化財センター 2008)。宮田栄二氏は、南九州での事例をもとに剥片尖頭器石器群以前と以後について整理を行なった(宮田 2006)。狸谷型ナイフ形石器を主体とする箕作遺跡(鹿児島県)や牧内第1遺跡(宮崎県)では剥片尖頭器や角錐状石器を伴わないことが示された(宮田 2006)。このことを参考に人吉球磨地域の当該期石器群を改めて俯瞰すると、角錐状石器を伴わない天道ヶ尾遺跡第1凹部と第2凹部の中間石器群や石清水遺跡 A～C ブロックといった石器群が確認できる。これとは逆に剥片尖頭器を伴わない石器群として天道ヶ尾遺跡第4ブロック、白鳥平 B 遺跡北①石器群が認められる。白鳥平 B 遺跡北①石器群の角錐状石器は小型のみで占められ大型のものは組成しない。このことを時期差と考えれば天道ヶ尾遺跡第4ブロック石器群より後続する石器群と理解できよう。当該地域のⅢ期石器群を整理すれば、狸谷型ナイフ形石器を単純組成する段階→(X)→天道ヶ尾遺跡第1凹部と第2凹部の中間石器群、石清水遺跡 A～C ブロック→天道ヶ尾遺跡第4ブロック石器群→白鳥平 B 遺跡北①石器群となる。鼓ヶ峰遺跡Ⅸ層石器群は示された遺物分布によれば角錐状石器は集中部から大きく外れた場所から出土していることがわかる。切出型、中原型のナイフ形石器、台形石器と搔・削器といった比較的単純な石器組成を示すことが理解でき、天道ヶ尾遺跡第1凹部と第2凹部の中間石器群や石清水遺跡 A～C ブロック石器群と近い時間的位置づけが可能であろう。白鳥平 A 遺跡をどのように評価するかという点について私見を記しておく。当該石器群は前述したとおり A～D 群の4つの集中部が確認され、利用される石材から A、C 群と B 群、D 群に大きくまとめられる。遺物分布が図示されている C 群では、中原型ナイフ形石器と角錐状石器が集中部から離れた場所から出土しており C 群の石器群に含まれない可能性が考えられる。この点が妥当性を持つとするならば原の辻型台形石器を組成する A 群とその技術的類似性がみられる C 群は、天道ヶ尾遺跡第1凹部と第2凹部の中間石器群、石清水遺跡 A～C ブロック石器群に先行する(X)に位置付けられるものとする。

6. おわりに

日本における旧石器時代研究の幕を開いた相沢忠洋氏は『「岩宿」の発見-幻の旧石器を求めて-』(講談社文庫)の中で遺跡探求の目指すところを「心の夢としての祖先の生活の遺跡の追究、一家団らんへの思慕」と語る。考古学、発掘調査で得られる資料、情報には土器や石器など腐らずに残されたモノや大地に刻まれた遺構に限られる。この

数少ない情報の中から遺跡を残した人々の生活や当時の社会を復元する。考古学とは何とも壮大なロマンである。

ここで改めて検討を試みた白鳥平 A 遺跡は、九州縦貫道人吉-えびの間建設に伴う事前調査によって得られた資料群である。開発によって消えてしまう前に発掘調査を行うことで記録保存を行った。既に、遺跡そのものは高速道路の開通により今はない。椎名慎太郎氏は『遺跡保存を考える』(岩波新書)で、「この緊急調査のなかには、(略)かなり粗略なものがあり、本来そこから得られるべき情報量のごく一部しか後世に遺せない(略)。いわば、現代人はこうした研究上の「資源」さえ、はなはだしく浪費している」と指摘する。実に耳の痛い言葉である。

しかし、記録保存することだけが目的ではない。そこから得られる情報を整理し、地域の歴史を明らかにしていくことが大事である。そのためには、発掘調査が遺跡を理解するための基礎的作業であることを再認識しなければならない。報告書はその記録の公表であり、遺跡を通じた地域研究の出発点である。発掘調査を担当した者として遺跡を遺した人々の生活、活動の痕跡を再検討し、改めて当該期の石器群を再評価し、地域史研究の一助になればと考える。最後に、本稿をまとめるにあたりご教示をいただいた多くの方々、そして挿図の作成にあたりトレースからレイアウトまでご協力いただいた築出直美、唐木ひとみ両氏と掲載の機会を与えていただいた坂口圭太郎氏に末筆ながら感謝の意を表します。

【参考文献】

- 桑波田武志 2004 「石清水型削器小考」『縄文の森から』第2号
- 宮田栄二 2006 「剥片尖頭器石器群とその前後の石器群について -南九州における最新の調査成果から-」『縄文の森から』第4号
- 綿貫俊一 2006 「AT 降灰以後の旧石器時代石器群 -東北九州と周辺地域の変遷および関係について-」『九州旧石器』第10号
- 岩谷史記 1998 「狸谷遺跡V層石器群における特徴的なナイフ形石器について -狸谷型ナイフ形石器の研究(1)-」『肥後考古』第11号
- 木崎康弘 1988 「九州ナイフ形石器文化の研究—その編年と展開—」『旧石器考古学』37 旧石器文化談話会
- 木崎康弘 1994 「剥片尖頭器と石器文化について」『九州旧石器時代関係資料集Ⅲ 剥片尖頭器』九州旧石器文化研究会
- 橋 昌信 1990 「AT(始良 Tn 火山灰)上位のナイフ形石器文化」『史学論叢』21 別府大学
- 木崎康弘 2003 「後期旧石器時代の変遷と剥片尖頭器の評」『旧石器研究 40 年紀年 旧石器人の生活と遺跡』
- 越智睦和 2006 「今峠型ナイフ形石器の編年的考察 -東九州を中心として-」『九州旧石器』第10号 九州旧石器文化研究会
- 岸田裕一 2006 「宮崎県におけるナイフ形石器終末前夜の様相 -北牛牧第5遺跡第Ⅱ文化層の検討-」『九州旧石器』第10号
- 萩 幸二 2009 「いわゆる(狸谷型ナイフ形石器)の意義づけ」『九州旧石器』第13号 九州旧石器文化研究会
- 萩 幸二 2011 「狸谷型ナイフ形石器に関する考察」『九州旧石器』第14号 九州旧石器文化研究会
- 熊本県教育委員会 1990 『天道ヶ尾遺跡(Ⅱ)』熊本県文化財調査報告第111集
- 熊本県教育委員会 1988 『鼓ヶ峰遺跡』熊本県文化財調査報告第96集
- 熊本県教育委員会 1994 『白鳥平B遺跡』熊本県文化財調査報告第142集
- 熊本県教育委員会 1993 『白鳥平A遺跡』熊本県文化財調査報告第127集
- 人吉市教育委員会 1995 『上ノ寺遺跡群』『石清水遺跡』人吉市文化財調査報告
- 熊本県教育委員会 1987 『狸谷遺跡』熊本県文化財調査報告第90集
- 熊本県教育委員会 2002 『頭地田口A遺跡』熊本県文化財調査報告第206集
- 熊本県教育委員会 2016 『北中島西原遺跡』熊本県文化財調査報告第319集
- 五木村教育委員会 1995 『野々脇遺跡』五木村文化財調査報告第1集
- 松元町教育委員会 2000 『宮ヶ迫遺跡』松元町埋蔵文化財発掘調査報告書(3)
- 鹿児島県立埋蔵文化財センター 2008 『仁田尾遺跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(128)
- 椎名慎太郎 1994 『遺跡保存を考える』(岩波新書) 岩波書店

石棺系装飾古墳について一考察

装飾古墳館 坂口 圭太郎・村上 光治・菊川 知美

1 はじめに

石棺系装飾古墳は、装飾古墳の一つとして分類されている。最も古いとされる石棺系装飾古墳は4世紀末頃に発生したと考えられている。その特徴は、石棺に直弧文や円文などの装飾を浮き彫りまたは線刻で表現したものである。

大正時代に京都帝国大学による装飾古墳の調査により全国で知られるようになった装飾古墳は、その発生について議論がなされている。ここではその発生について言及しないが、全国に700基余りが確認されている装飾古墳の中でも、この石棺系装飾古墳については、早い段階(4世紀末)で出現しているが、6世紀に入るといくつかの例を残し減じていく。

今回は、平成28年に研究紀要第14集で報告した全国の装飾古墳一覧(中間報告)以降に調査収集したデータを見直す中で、石棺系装飾古墳についてまとめるものである。

2 石棺系装飾古墳の起源

日本における石棺系装飾古墳の初源は大阪府柏原市にある安福寺境内石棺^{写真①}(伝玉手山3号墳)^{*1}であるとされる。4世紀末に比定されるこの石棺は、棺蓋の側面周囲を直弧文で装飾している。

3 石棺系装飾古墳の分類

石棺系装飾古墳の定義については前節で述べているが、ここではそのなかを更に分類する。まず、埋葬形態は石棺直葬と竪穴式あるいは横穴式石室に納棺する2種類に分ける。この理由は、古墳が造られた時期に大きく影響されると考える。石棺直葬は古い埋葬形態である。一方で竪穴式石室や横穴式石室に納棺するものは追葬が可能な葬送であることから、装飾自体が追刻の可能性は否定できない。

次に装飾の部位による分類である。石棺の蓋あるいは身の外面に装飾が施されるものと蓋の裏面や石棺の内側(内面に装飾が施されるものに分類できる。この両者には大きな相違がある。棺の外面は、埋葬後も視認されることを意識していると考えられ、棺の内面は、被葬者(死者)に向けてのものと考えられる。

このように、一概に石棺系装飾古墳といっても、装飾文様や位置により、その意味が異なると考えられる。を想定したうえで、あらためて石棺系装飾古墳の分類を検討する。

4 石棺系装飾古墳の時代的変遷と伝播

装飾古墳の初源のひとつにこの石棺系装飾古墳があるとする説は一般的である。八代海沿岸部の箱式石棺に装飾が登場するのは5世紀に入ってからであり、初期の石棺系装飾古墳は4世紀末には登場していると考えられている。その中で4世紀後半の安福寺境内石棺^{*1}がある。この石棺は上蓋の側面を廻るように直弧文を線刻している。吉備の源流をもつとされるこの直弧文を装飾していることが特徴である。この他に4基の石棺系装飾古墳があり、いずれも福井県内にあり、近畿から福井に至る流れがあることは明確である。その中でも福井市にある小山谷古墳の船形石棺蓋の上面の両側に鏡と考えられる円文が8個宣告されていることに注目したい。



写真①安福寺境内石棺(伝玉手山3号墳)



図1 棺蓋外に装飾をもつ



図2 棺蓋内に装飾をもつ

次に5世紀の前半から中ごろにかけて、北部九州や北陸において石棺系装飾古墳が造られる。八代海沿岸部においても、5世紀の前半には箱式石棺の内面に円文や武具類などを描いた石棺系装飾古墳が登場する。熊本県上天草市大矢野町の広浦古墳や八代市大鼠蔵東麓1号墳などである。広浦古墳では鏡を模した円文の他に大刀などが、また大鼠蔵東麓1号墳では同心円文とともに大刀、弓、鞆(ゆぎ)、短甲などが浮彫で表現されている。これらは死者をおさめる箱式石棺の内部に装飾を描いており、先にあげた石棺の上蓋など外面に装飾を施した意味とは全く異なる考えである。このように棺身の内面に描かれる意味は副葬品と考えられる。この系譜は同じく八代海沿岸部の竹ノ内古墳石棺などに引き継がれていく。

一方で5世紀中に造られたとされる福岡県八女郡広川町の石人山古墳^{写真②}では横穴式石室に家型石棺を納めており、その上蓋に直弧文と同心円文代を浮彫で装飾している。これらは安福寺境内石棺の系譜を引き継いだものと考えられ、熊本県氷川町の大王山古墳などがそれに続く。

5世紀の後半に入ると福岡県や佐賀県、熊本県では県北部において石棺系装飾古墳が造られるようになる。熊本県宇城市不知火ある鴨籠古墳では家形石棺の上蓋に直弧文や円文、連続三角文などを浮彫で表現しており、類例としては、島根県松江市丹花庵古墳^{写真③}の長持形石棺などがある。

九州以外では、岡山県備前市鶴山丸山古墳において堅穴式石郭に長持形石棺を埋納しており、その棺蓋の両側に3つの家屋文の間にそれぞれ2個ずつの円文を装飾している。類例として4世紀末とやや時代をさかのぼって福井市の小山谷古墳がある。

6世紀にはいと安福寺境内石棺の系譜は減少していく。また八代海沿岸部で発生した箱式石棺の内面に装飾を描く石棺系装飾古墳は、石棺系から石障系へと埋葬施設の形態変化により消失していくと考えられる。

熊本県では山鹿市や八代市などで石棺系装飾古墳がわずかに残っていくが、そのほかの地域でも散発的に作られているに過ぎない。その中でも注目されるのが、奈良県御所市の水泥南古墳である。横穴式室に納められた家形石棺の縄掛け状突起に線刻された鋸歯文は「破邪」を意識して描かれたものと考えられ、安福寺境内石棺の系譜が続いていることを裏付ける例と考えられる。

5 石棺系装飾古墳の分類とその系譜

4章で石棺系装飾古墳の系譜について述べた点を整理する。まず石棺系装飾古墳の初源として畿内で作られた安福寺境内石棺に代表される石棺の上蓋など外面に装飾を施すものがある。次に八代海沿岸部で造られた箱式石棺の内面に装飾を施すものの二つに分類される。このうち前者については、北陸地方や北部九州にその系譜をたどることができる。一方、八代海沿岸部で始まった石棺系装飾古墳は、その埋葬形態が石棺から石障系横穴式石室へと変化することにより消失していく。

このように石棺系装飾古墳は、その発生する地域と形態により、装飾を施す意味が異なる装飾古墳である。その意味でもこの石棺系装飾古墳の造られた場所や世紀を検討することは、装飾古墳を考えるうえで非常に重要な意味を持つ。

次章では装飾の部位とそこに込められた意味について述べたい。



写真②石人山古墳石棺 棺蓋



写真③丹下庵古墳石棺 棺蓋



図3 棺身外に装飾をもつ

6 まとめ

装飾古墳館では開館以来装飾古墳の調査研究を続けてきている。平成7年の【全国の装飾古墳1】宮崎県の装飾古墳地下式と横穴墓を皮切りに、全国の装飾古墳の企画展を開催してきた。これらの企画展に伴う調査研究に加え平成29年度に各県に照会をかけ、全国の装飾古墳一覧(中間報告)をまとめた。それらの基礎資料を再考する中で石棺系装飾古墳について、もう一度新たな視点で考察する必要が生じてきた。その結果を表①にまとめた。

その結果、石棺系装飾古墳と分類できるものが43基ある。その多くは熊本県であるが、近畿や中国、北陸に見ることができる。また図1から4にかけて石棺に施された装飾の位置を地図に落とし込んでみた。



図4 棺身内に装飾をもつ

この結果から、棺身内に装飾をもつものは、九州の熊本に集中して存在すること、棺身外は佐賀県、福岡県でのみ存在すること、棺蓋外は大阪府、奈良県、福岡県、愛知県、福岡県、熊本県、佐賀県、大分県に及ぶ。棺蓋内に装飾を持つものは熊本県で2例のみである。

以上、石棺系装飾古墳の概要と装飾する部位の分布についてまとめた。今後の調査研究により更なる装飾古墳の謎を解明する一助となることを期待して考察を終わることとする。

表① 石棺系装飾古墳一覧

No.	調査研究番号	コード	墓内形状	名称	読み仮名	コード	所在地①	所在地②	時期	墳丘(形)	埋葬構造	石棺形状	装飾位置(石棺外)	装飾位置(棺蓋内)	装飾位置(棺蓋外)	装飾位置(棺身内)	装飾方法	装飾種類	指定年月日	備考(指定日時)	記録番号
1	熊本県	18	1	小笠原古墳	こがさわ	18-01	熊本市	熊本市	6世紀	不明	石棺	長方形	横線				溝	熊本市	193	熊本県立博物館	
2	熊本県	18	2	山田古墳	やまだ	18-02	熊本市	熊本市	6世紀	不明	石棺	長方形	横線				溝	熊本市	194	熊本県立博物館	
3	熊本県	18	3	藤原古墳	ふじわら	18-03	熊本市	熊本市	6世紀	不明	石棺	長方形	横線				溝	熊本市	195	熊本県立博物館	
4	熊本県	18	4	丸山古墳	まるやま	18-04	熊本市	熊本市	6世紀	不明	石棺	長方形	横線				溝	熊本市	196	熊本県立博物館	
5	熊本県	18	5	中島古墳	なかしま	18-05	熊本市	熊本市	6世紀	不明	石棺	長方形	横線				溝	熊本市	197	熊本県立博物館	
6	熊本県	23	1	天徳寺古墳	てんとく	23-01	熊本市	熊本市	6世紀	不明	石棺	長方形	横線				溝	熊本市	198	熊本県立博物館	
7	熊本県	27	28	宮原古墳(国定山(山名))	みやはら	27-28	熊本市	熊本市	6世紀	不明	石棺	長方形	横線				溝	熊本市	199	熊本県立博物館	
8	熊本県	29	1	大塚古墳	おほづか	29-01	熊本市	熊本市	6世紀	不明	石棺	長方形	横線				溝	熊本市	200	熊本県立博物館	
9	熊本県	32	5	丹波古墳	たんば	32-05	熊本市	熊本市	6世紀	不明	石棺	長方形	横線				溝	熊本市	201	熊本県立博物館	
10	熊本県	33	2	山田古墳	やまだ	33-02	熊本市	熊本市	6世紀	不明	石棺	長方形	横線				溝	熊本市	202	熊本県立博物館	
11	熊本県	40	2	山田古墳	やまだ	40-02	熊本市	熊本市	6世紀	不明	石棺	長方形	横線				溝	熊本市	203	熊本県立博物館	
12	熊本県	40	7	山田古墳	やまだ	40-07	熊本市	熊本市	6世紀	不明	石棺	長方形	横線				溝	熊本市	204	熊本県立博物館	
13	熊本県	41	5	山田古墳	やまだ	41-05	熊本市	熊本市	6世紀	不明	石棺	長方形	横線				溝	熊本市	205	熊本県立博物館	
14	熊本県	41	6	山田古墳	やまだ	41-06	熊本市	熊本市	6世紀	不明	石棺	長方形	横線				溝	熊本市	206	熊本県立博物館	
15	熊本県	43	7	山田古墳	やまだ	43-07	熊本市	熊本市	6世紀	不明	石棺	長方形	横線				溝	熊本市	207	熊本県立博物館	
16	熊本県	43	161	山田古墳	やまだ	43-161	熊本市	熊本市	6世紀	不明	石棺	長方形	横線				溝	熊本市	208	熊本県立博物館	
17	熊本県	43	162	山田古墳	やまだ	43-162	熊本市	熊本市	6世紀	不明	石棺	長方形	横線				溝	熊本市	209	熊本県立博物館	
18	熊本県	43	164	山田古墳	やまだ	43-164	熊本市	熊本市	6世紀	不明	石棺	長方形	横線				溝	熊本市	210	熊本県立博物館	
19	熊本県	43	168	山田古墳	やまだ	43-168	熊本市	熊本市	6世紀	不明	石棺	長方形	横線				溝	熊本市	211	熊本県立博物館	
20	熊本県	43	117	山田古墳	やまだ	43-117	熊本市	熊本市	6世紀	不明	石棺	長方形	横線				溝	熊本市	212	熊本県立博物館	
21	熊本県	43	131	山田古墳	やまだ	43-131	熊本市	熊本市	6世紀	不明	石棺	長方形	横線				溝	熊本市	213	熊本県立博物館	
22	熊本県	43	136	山田古墳	やまだ	43-136	熊本市	熊本市	6世紀	不明	石棺	長方形	横線				溝	熊本市	214	熊本県立博物館	
23	熊本県	43	138	山田古墳	やまだ	43-138	熊本市	熊本市	6世紀	不明	石棺	長方形	横線				溝	熊本市	215	熊本県立博物館	
24	熊本県	43	137	山田古墳	やまだ	43-137	熊本市	熊本市	6世紀	不明	石棺	長方形	横線				溝	熊本市	216	熊本県立博物館	
25	熊本県	43	143	山田古墳	やまだ	43-143	熊本市	熊本市	6世紀	不明	石棺	長方形	横線				溝	熊本市	217	熊本県立博物館	
26	熊本県	43	152	山田古墳	やまだ	43-152	熊本市	熊本市	6世紀	不明	石棺	長方形	横線				溝	熊本市	218	熊本県立博物館	
27	熊本県	43	153	山田古墳	やまだ	43-153	熊本市	熊本市	6世紀	不明	石棺	長方形	横線				溝	熊本市	219	熊本県立博物館	
28	熊本県	43	180	山田古墳	やまだ	43-180	熊本市	熊本市	6世紀	不明	石棺	長方形	横線				溝	熊本市	220	熊本県立博物館	
29	熊本県	43	155	山田古墳	やまだ	43-155	熊本市	熊本市	6世紀	不明	石棺	長方形	横線				溝	熊本市	221	熊本県立博物館	
30	熊本県	43	151	山田古墳	やまだ	43-151	熊本市	熊本市	6世紀	不明	石棺	長方形	横線				溝	熊本市	222	熊本県立博物館	
31	熊本県	43	154	山田古墳	やまだ	43-154	熊本市	熊本市	6世紀	不明	石棺	長方形	横線				溝	熊本市	223	熊本県立博物館	
32	熊本県	43	156	山田古墳	やまだ	43-156	熊本市	熊本市	6世紀	不明	石棺	長方形	横線				溝	熊本市	224	熊本県立博物館	
33	熊本県	43	158	山田古墳	やまだ	43-158	熊本市	熊本市	6世紀	不明	石棺	長方形	横線				溝	熊本市	225	熊本県立博物館	
34	熊本県	43	157	山田古墳	やまだ	43-157	熊本市	熊本市	6世紀	不明	石棺	長方形	横線				溝	熊本市	226	熊本県立博物館	
35	熊本県	43	161	山田古墳	やまだ	43-161	熊本市	熊本市	6世紀	不明	石棺	長方形	横線				溝	熊本市	227	熊本県立博物館	
36	熊本県	43	161	山田古墳	やまだ	43-161	熊本市	熊本市	6世紀	不明	石棺	長方形	横線				溝	熊本市	228	熊本県立博物館	
37	熊本県	43	164	山田古墳	やまだ	43-164	熊本市	熊本市	6世紀	不明	石棺	長方形	横線				溝	熊本市	229	熊本県立博物館	
38	熊本県	43	161	山田古墳	やまだ	43-161	熊本市	熊本市	6世紀	不明	石棺	長方形	横線				溝	熊本市	230	熊本県立博物館	
39	熊本県	43	168	山田古墳	やまだ	43-168	熊本市	熊本市	6世紀	不明	石棺	長方形	横線				溝	熊本市	231	熊本県立博物館	
40	大分県	44	28	山田古墳	やまだ	44-28	大分市	大分市	6世紀	不明	石棺	長方形	横線				溝	大分市	232	大分県立博物館	
41	大分県	44	29	山田古墳	やまだ	44-29	大分市	大分市	6世紀	不明	石棺	長方形	横線				溝	大分市	233	大分県立博物館	
42	大分県	44	30	山田古墳	やまだ	44-30	大分市	大分市	6世紀	不明	石棺	長方形	横線				溝	大分市	234	大分県立博物館	
伊賀	伊賀県	53	1	穴ノ内古墳	あなの内	53-01	伊賀市	伊賀市	7世紀	不明	石棺	長方形	横線				溝	伊賀市	235	伊賀県立博物館	
伊賀	伊賀県	53	2	穴ノ内古墳	あなの内	53-02	伊賀市	伊賀市	7世紀	不明	石棺	長方形	横線				溝	伊賀市	236	伊賀県立博物館	
伊賀	伊賀県	53	3	穴ノ内古墳	あなの内	53-03	伊賀市	伊賀市	7世紀	不明	石棺	長方形	横線				溝	伊賀市	237	伊賀県立博物館	

参考文献

濱田耕作ほか 1917『肥後に於ける装飾ある古墳』,京都帝国大学
 濱田耕作ほか 1919『九州に於ける装飾ある古墳』,京都帝国大学
 斎藤忠 1952『装飾古墳の研究』,吉川弘文館
 斎藤忠 1973『日本装飾古墳の研究』,講談社
 斎藤忠 1989『壁画古墳の系譜 日本考古学研究2』,学生社
 小林行雄 1956『日本古墳文化の美術』『世界美術全集 古代初期2』,平凡社
 小林行雄 1964『装飾古墳』,平凡社
 坪井清足 1977『日本原始美術大系6』,講談社
 森貞次郎 1985『装飾古墳』,教育社

小田富士雄 1966 「古墳文化の地域的特色－九州」『日本の考古学IV』,河出書房新社
小田富士雄 1974 「図形文様の種類とその意義」『古代史発掘8』,講談社
藤井功・石山勲 1979 『装飾古墳 日本の原始美術10』,講談社
埋蔵文化財研究会 2002 『装飾古墳の展開』,埋蔵文化財研究会
柳沢一男 2022 『装飾古墳ガイドブック』,新泉社
福田匡朗 2017 「福井市・免鳥長山古墳出土石棺の意義」熊本県立装飾古墳館 平成29年度企画展図録
坂口圭太郎 2017 『ヲホド大王と越の国の装飾古墳』熊本県立装飾古墳館 平成29年度企画展図録
坂口圭太郎 1996 『大分県の装飾古墳』熊本県立装飾古墳館平成8年度企画展図録

鞠智城跡の東側で確認された版築・積土と列石

鞠智城・温故創生館 岡本 真也

1. はじめに

史跡鞠智城跡の確実な外郭線の長さは、周囲約3.5kmに及び、西側や南側は主に版築土塁で構築されていることが、発掘調査の結果、判明している。しかし、北側から東側の外郭線の構造については、急峻な断崖が続いてために、自然地形をそのまま利用した構造であったのではないかとようになっており、その詳細は不明であった。

着任した平成30年度、北側から東側の外郭線構造の手掛かりを求めて、踏査を行ったが、良い情報は得られなかったが、令和2年7月の豪雨后、崩落個所の確認を行っている最中に偶然にも版築箇所や土塁の基底石と思われる列石を確認することになった。この発見が大きなきっかけとなり、職員と一緒に再踏査を実施してきた。

その結果、図1のとおり、版築・積土を8地区(A、B、C、D、F、H、I、J)10地点、列石を4地区(D、E、G、H)12地点で新たに確認することができた。その地点を地図に落とし、写真撮影を行い、列石の略図作成(ピンポールで水糸を張り、水平器を使用してレベルを取り、平面図・立面図・断面図の略図を作成)を行ってきた。

今回、踏査結果の概要を報告をまとめ、北側から東側の外郭線の繋がりや構造について概要を報告したい。

なお、人工的に積み重ねられ、硬く締まる土層を「版築」、積み重ねられてはいるが柔らかい土層を「積土」と表記することにした。

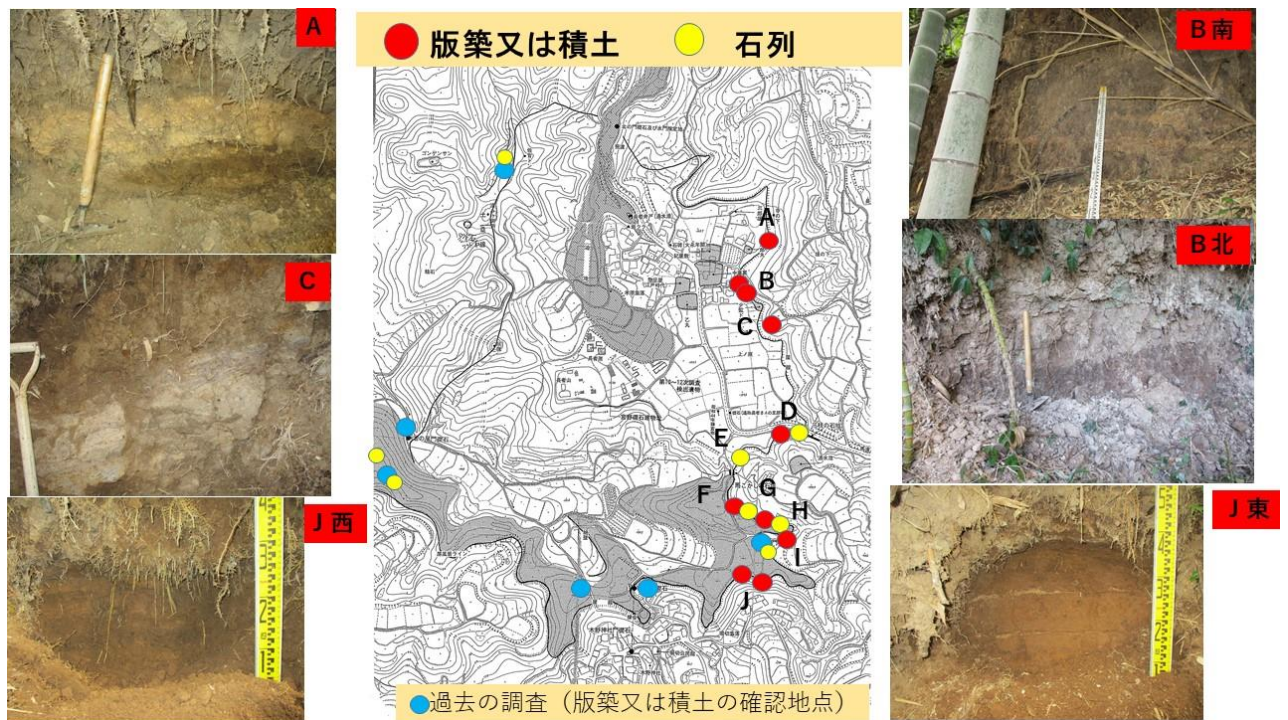


図1 遺構位置図(全体)及び写真(A、B、C、J地区)

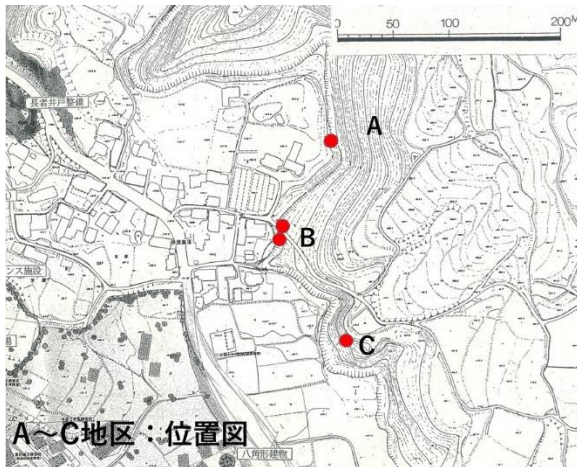


図2 A～C地区:位置図

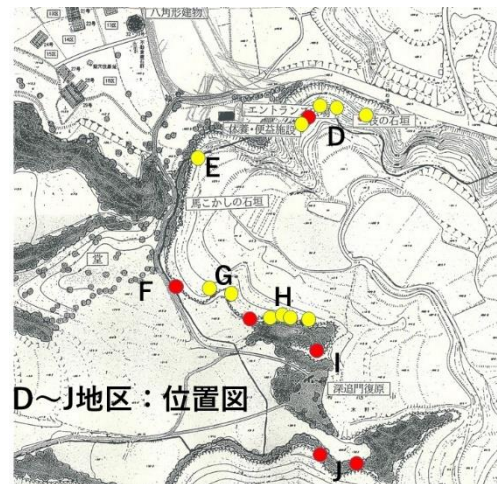


図3 D～J地区:位置図

2. 遺構の概要

(1) 版築または積土

【A地区】(図1, 2 参照)

標高約 140mの竹林を造成した東側に長さ約5m高さ約 1.5mの壁面がある。その中に 2カ所(長さ約 0.8～1.3m)に土層堆積が確認できる。黒色土(3～5cm:ブラックバントより上位の層でクロニガ層やクロボク層の可能性あり)と橙色土(2～18cm:阿蘇溶結凝灰岩の風化粘土)が交互に 6層以上にわたり堆積しており、明らかに人為的な層位が確認できる。黒色土は固く締まる層もあるが、橙色土はパサパサして全体的に柔らかい積土の状況である。東側は崖になっており、土塁の一部ではないかと想定される。

【B地区】(図1, 2 参照)

米原集落から鐘掛松集落へ繋がる下り車道の両側に長さ約 3m高さ約 1mの土層堆積層が確認できる壁面がある。標高は約 139m前後である。北側の壁面には幅約 17～25cmの黒色土の上に5～20cmの阿蘇溶結凝灰岩風化土の白～肌色粘質土層が堆積している。南側は厚さ 8～80cmの黒色土(Hue7.5YR3/2)の中に、厚さ 6～9cmの阿蘇溶結凝灰岩風化土の橙色土(Hue5YR4/6)が 2層にわたり堆積している。北側と南側ともに黒色土主体の中に粘質土層が含まれており、Aエリアに繋がる土塁の一部と想定される。どの層も固く締まっており、版築と考えられる。

【C地区】(図1, 2 参照)

ブドウ園の基礎標柱 7 本目の東側崖面を5mほど下った場所に土層が確認できる場所がある。標高約 140m前後と推定される。幅約 2m高さ約 1mの壁面に阿蘇溶結凝灰岩の風化土壌層がやや斜めの層をなして硬く締まって堆積している。凝灰岩自体の自然堆積層の可能性も否定できないが、一応、版築として紹介しておきたい。

【D地区】(図1, 3, 4 参照)

温故創生館東隣にあるトイレの東側崖面を約 5m下った場所に土層が確認できる場所がある。標高約 142m前後と推定される。幅約 70cm高さ約 60cmの壁面に版築が確認できる。30～40 cm大の垂角礫花崗岩 2石と 20cmを超える垂角礫凝灰岩 1石が並列しているレベルから上部に約 60 cmにわたり 7層の土層がある。いずれもガチガチに固く締まっている。下層から①層【にぶい黄橙色土(Hue10YR6/4):厚さ 10 cm、凝灰岩の風化土壌でプライマリーな基盤層で所々に 5～10cm大の軽石を含む】、②層【橙色土(Hue5YR6/6):厚さ 13～15 cm、赤色粘質土に黒色土が混ざる版築層】、③層【暗褐色土(Hue7.5YR4/4):厚さ 10 cm、赤色粘質土に黒色土が混ざる版築層、色調は黒色】、④層【にぶい黄橙色土(Hue10YR6/4):厚さ 10 cm、凝灰岩の灰白色風化粘質土が主体の版築層】、⑤層【褐灰色土(Hue10YR5/1):厚さ 10 cm、凝灰岩の灰色風化粘質土が主体の版築層、色調は黒色】、⑥層【にぶい黄橙色土(Hue10YR6/4):厚さ 6～10 cm、凝灰岩の白色

風化粘質土が主体の版築層】、⑦層【暗褐色土(Hue10YR4/4):厚さ 25 cm～、黒色土に 3～10mm大の白色粘質土粒子が混ざる版築層、色調は黒色】という堆積状況である。

3石(凝灰岩1石、花崗岩2石)は版築の基底石であり、基盤となる阿蘇溶結凝灰岩の風化土壌の上に版築を構築している構造がわかる貴重な場所と考えられる。

【F地区】(図1, 3, 8 参照)

管理用車道の東側に長さ約 1.7m高さ約 0.7mの土層堆積層が確認できる壁面がある。標高は約140m前後である。阿蘇溶結凝灰岩の風化土壌であるにぶい黄褐粘質土(Hue10YR6/4)を斜めに整地した後に明赤褐色粘質土(Hue5YR5/6)を主体として、厚さ1～6cmの阿蘇溶結凝灰岩本体の褐灰色砂質土(Hue7.5YR4/1)を交互に版築した状況が伺える。どの層も固く締まっており、深迫門跡に繋がる土塁の一部と想定される。

【H地区】(図1, 3, 11 参照)

令和2年7月の水害により高さ約 10 m²、幅約6mにわたり壁面崩落した現場である。そのほとんどが崩落土で覆われているため全容は不明であるが、高さ約 2mに長さ 2m以上にわたり、固く締まった版築層が確認できる。東側6m先にも版築層が部分的に確認できることから、そのまま深迫門跡へ繋がっていたと考えられる。この版築層は、Fエリアと同様な堆積状況をしており、阿蘇溶結凝灰岩の風化土壌であるにぶい黄褐粘(Hue10YR6/4)を整地した後に明赤褐色粘質土(Hue5YR5/6)を主体として、阿蘇溶結凝灰岩本体の褐灰色砂質土(Hue7.5YR4/1)を交互に版築した状況が伺える。標高は約135m前後と想定される。

【I地区】(図1, 3, 12 参照)

深迫門北側遊歩道の下り坂北側に長さ約 1.7m高さ約 0.7mの樹根でオーバーハングして場所があり、堆積土層が確認できる。標高は約130m前後である。非常に脆い阿蘇溶結凝灰岩本体の上に、凝灰岩の風化土壌を主体とする白色粘質土(Hue10YR6/4)を約 30 cmにわたり、約 2～6 cm交互に積み上げている。さらに上層は、凝灰岩の風化土壌を主体とするやや色調の異なる粘質土(肌色 Hue5YR5/6、白色 Hue10YR6/4、橙色 Hue5YR4/6)を 2～6cmであるにぶい黄褐粘質土(Hue10YR6/4)を積み上げている。F、H地区とは積み方が異なる版築。また、深迫門跡の土塁の延長上にあり、北側にカーブをしながらF、Hエリアへ繋がっている。

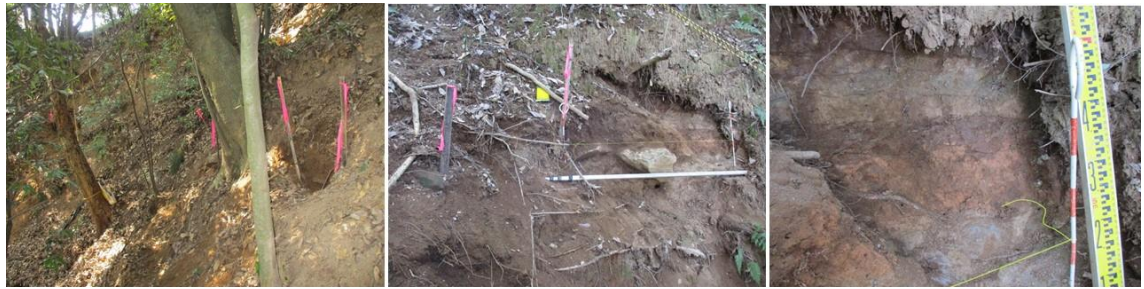
【J地区】(図1, 3 参照)

深迫門南側土塁線の東端にあたる。崖面天端から高さ約 3m下った場所に 2カ所の土層確認ができる壁面がある。いずれも長さ約 50cm、高さ約 30cmの狭い壁面であるが、版築の状況がわかる。約 30m 隔てた 2カ所の標高は約128m前後と想定される。東側は、褐色粘質土(約 11 cm)と白色粘質土(約 1 cm)の互層であり、褐色粘質土が極端に厚い。一方、西側は、暗褐色粘質土(約 2～5 cm)と褐色粘質土(約 2～4 cm)の互層が少なくとも 8 層にわたり堆積している。F、H地区とは積み方が異なり、I地区ともやや異なるが、ガチガチに硬く締まっている。

(2) 列石

【D地区】(図1, 3, 4～7 参照)

温故創生館東隣にあるトイレの東側崖面を約5m下った場所に列石が確認できる。南西から北東に地形に沿ってほぼ同レベル(標高約 142m前後と推定)に点在している。約 22mの間に 9石(南西側からD①～D⑨)と仮称確認した。D①:凝灰岩(20cm以上の亜角礫)、D②:花崗岩(30cm以上の亜角礫)、D③:花崗岩(40cm以上の亜角礫)、D②③は並列しており、すぐ脇に版築層が確認できる。約 60度の急傾斜地である。約 8m北西側に 2石並列している。D④:珪質岩(25cm以上の亜角礫、この石材は長者山墓地の基盤層である可能性が高い)、D⑤:凝灰岩(40cm以上の亜角礫)、大木を挟み約 2m離れて 2石が並列している。この間ピンポールで土中を確認すると石のような感触があるため、連続している可能性がある。D⑥:花崗岩(20cm以上の亜角礫)、D⑦:凝灰岩(30cm以上の亜角礫)。約 4.5m西側離れてD⑧:花崗岩(30cm以上の亜角礫)、さらに約 5m西側離れてD⑨:花崗岩(30cm以上の亜角礫)を確認した。しかし、D⑨は原位置を保っておらず、1m程ズレ落ちている。



D：列石遠景（6,7石周辺東より）

D：1～3石・版築近景（東より）

D：版築近景（東より）



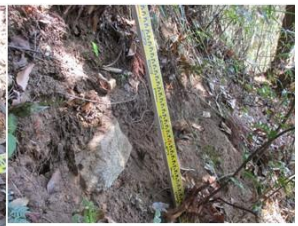
D：4,5石（東より）



D：6,7石（南より）

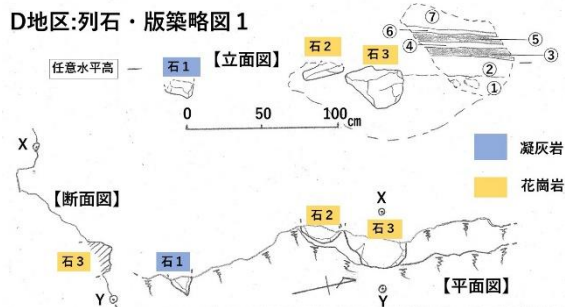


D：8石（南西より）

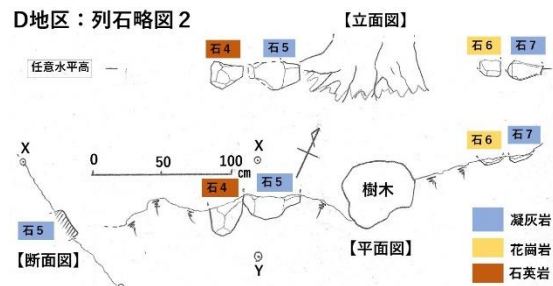


D：9石（西より）

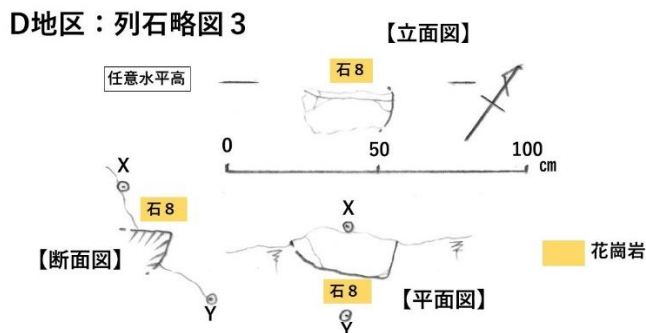
第4図 D地区写真



第5図 D地区：列石・版築略図1



第6図 D地区：列石略図2



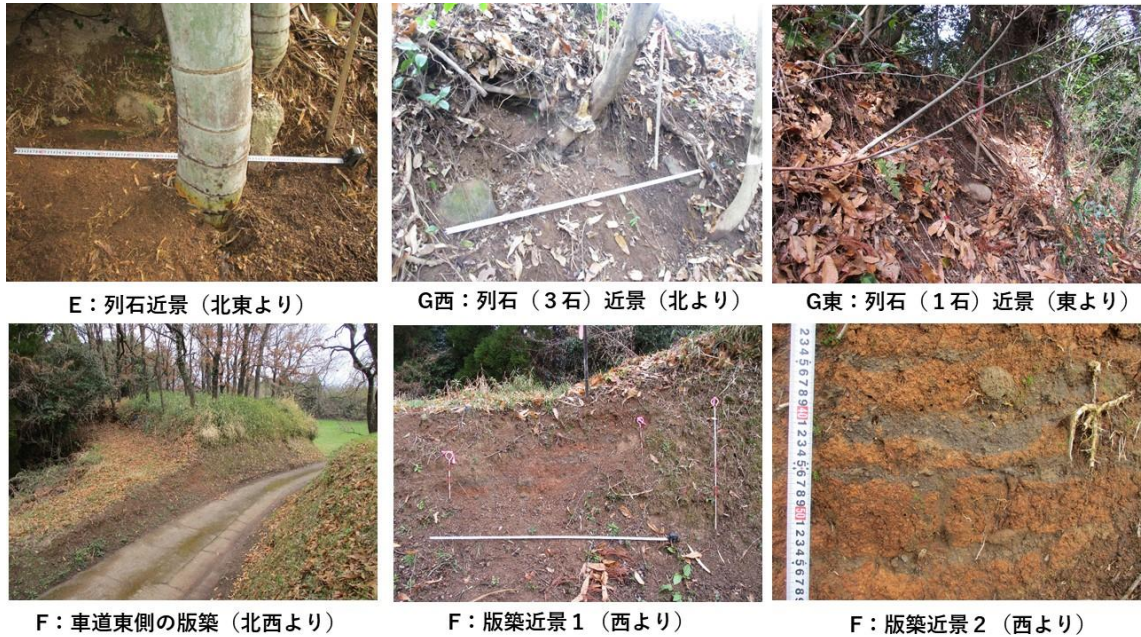
第7図 D地区：列石略図3

【E地区】(図1, 3, 8, 9 参照)

温故創生館の南東側の壁面、高さ約5m下った場所に樫の大木があり、その根元に6石(E①～E⑥)と仮称：うち、2石は拳大の小石)を確認した。1.5mの中にはほぼ並列した状況である。標高は約135m前後と推定される。E①：凝灰岩(35cm以上の平石)、E②：花崗岩(25cm以上の角礫)、E③：凝灰岩(10cm大の平石)、E④：凝灰岩(20cm以上の垂角礫)、E⑤：凝灰岩(15cm大の平石)、E⑥：花崗岩(20cm以上の垂角礫)、E①～③は原位置を保っている可能性が高い。E③の小石は裏込め石としての役割が考えられる。

【G地区】(図 1, 3, 8, 10 参照)

FとHエリアのほぼ中間に位置し、西側に3石、東側に1石確認できる。Fエリアの版築断面から東へ約15m離れている。標高は約135m前後と推定される。G①:凝灰岩(30cm以上の垂角礫の河原石)、G②:凝灰岩(25cm以上の垂角礫)、G③:凝灰岩(35cm以上の丸みを帯びた河原石)、1.7mの間に3石がほぼ同レベルにあることから原位置を保っていると考えられる。この地点から約5m東側にG④:安山岩(30cm以上の丸みを帯びた河原石)が1石のみ確認できる。



E: 列石近景 (北東より)

G西: 列石 (3石) 近景 (北より)

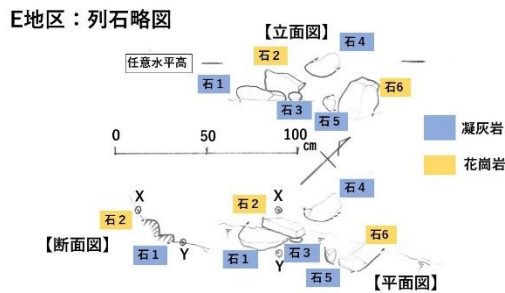
G東: 列石 (1石) 近景 (東より)

F: 車道東側の版築 (北西より)

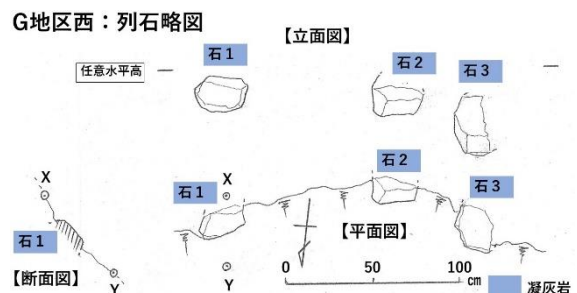
F: 版築近景 1 (西より)

F: 版築近景 2 (西より)

第8図 E、F、G地区写真



第9図 E地区: 列石略図



第10図 G地区: 列石略図

【H地区】(図 1, 3, 11~14 参照)

深迫門から続く北側尾根に位置し、34mの急峻な崖面に35石(H①~H⑳)が確認できた。しかし、原位置を保っている列石は約半数であり、ズレ落ちて辛うじて斜面に留まっている状況である。崖下には転石が多くみられ、もともと崖面にあった列石だったと考えられる。現在確認できる石列も崩落の可能性が非常に高く、早急な保護が望まれる。標高は約135m前後と想定される。崖崩落地点の東端から東へ約8m地点にH①:凝灰岩(約20cm大の割石)、H①から1m東側にH②:凝灰岩(約30cm大の丸みを帯びた河原石)、H②から5m東側にH③:凝灰岩(約50cm大の丸みを帯びた平石とH④:凝灰岩(約25cm大のやや丸みを帯びた河原石)が並列している。H④から約2m東側にH⑤:安山岩(約20cmの丸みを帯びた扁平の河原石)H⑥:凝灰岩(約40cm大の扁平な割石)があり、この2石は原位置を保っていると考えられる。ただ、H①~

⑥石の大きさは、計測不可能な急斜面地にあるため目測によるものである。H⑥から約1m東側に下にややズレ落ちた状態でH⑦:凝灰岩(約30cm、厚み約10cmの割石)H⑧:凝灰岩(約15×20cm大の丸みを帯びた河原石)H⑨:凝灰岩(約30×40cm大の丸みを帯びた河原石)H⑩:凝灰岩(約20×40cm大の亜角礫)が並列しており、H⑩から約1m東側にH⑪:凝灰岩(約30×40cm大の丸みを帯びた河原石)が2個に割れた状態、H⑫:凝灰岩(約30×30cm、厚み約15cmの割石)が連なるように確認できる。

H⑫から約1m東側にやや0~40cmほどレベルを上げた状態で9石(H⑬~⑳)が並列している。特にH⑬~⑮、⑱は、ほぼ同レベルにあり、崖面にしっかり食い込んでいることから原位置を保っていると考えられる。H⑬:凝灰岩(約25×20cm、厚み約15cmの割石)、H⑭:凝灰岩(約30×20cm、厚み約10cmの割石)、H⑮:凝灰岩(約25×20cm、厚み約10cmの割石)が並列し、この3石からやや20cmほどズレ落ちた状態でH⑯:凝灰岩(約25×20cm、厚み約15cmのやや丸みを帯びた亜角礫)と10cmほどズレ落ちた状態でH⑰:凝灰岩(約30×15cm、厚み約8cmの丸みを帯びた扁平の河原石)が確認できる。H⑬~⑮と同レベルにH⑱:凝灰岩(約35×15cm、厚み約15cmの丸みを帯びた河原石)があり、その上にやや小ぶりのH⑲:凝灰岩(約15×10cm、厚み約10cmの丸みを帯びた河原石)が重なる状態で確認できる。H⑳:凝灰岩(約25×40cm、厚み約20cmの丸みを帯びた河原石)が2個に割れた状態とH㉑:凝灰岩(約30×10cm、厚み約20cmの丸みを帯びた河原石)は、H⑱より、15~25cmほどズレ下がった状態で連なっている。H㉒から東側に約2m、レベルも更に約1mほどズレ落ちた状態でH㉓:凝灰岩(約50×30cm大の丸みを帯びた割れ面を持つ河原石)があり、そこから更に東へ1mレベルが約1m上がった状態でH㉔:凝灰岩(約40×25cm、厚み約10cmの割石)、H㉕:安山岩(約15×10cm、厚み約10cmの河原石)、H㉖:凝灰岩(約30×20cm、厚み約15cmの割石)が原位置と思われる状態で確認できる。H㉖から約3.5m東へ50cmほどズレ落ちた状態でH㉗:凝灰岩(約30×20cm、厚み約10cmの丸みを帯びた河原石)がある。この周辺は傾斜角度が約60°~70°あり、当時の列石は既に崩落して消滅していると考えられる。H㉘から約5m東の地点にH㉙:凝灰岩(約50×25cm、厚み約10cmの丸みを帯びた河原石)が2個に割れた状態が確認できる。この石は阿蘇4火砕流の中にプライマリーに含まれている凝灰岩の可能性も否定できないが、列石と同レベルにあること、50cmと巨石であることから列石と判断した。

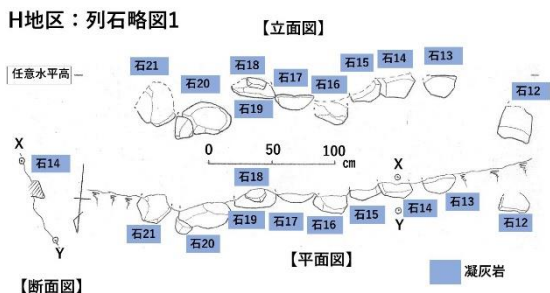
H㉙から約10m東側に8石(H㉚~㉙)が並列している。特にH㉚~㉜、㉞~㉙は、ほぼ同レベルにあり、崖面に食い込んでいることから原位置を保っていると考えられる。H㉚:凝灰岩(約25×25cm、厚み約10cmの割石)、H㉛:凝灰岩(約25×20cm、厚み約10cmの割石)、H㉜:凝灰岩(約20×20cm、厚み約10cmの割石→実測中、50cmほどズレ落ちた)が並列し、この3石からやや20cmほどズレ落ちた状態でH㉝:凝灰岩(約30×20cm、厚み約15cmの割石)とH㉞:凝灰岩(約30×25cm、厚み約20cmの割石)が確認できる。更に約20cm上の原位置と考えられる位置にH㉟:凝灰岩(約40×20cm、厚み約10cmの割石)、H㊱:凝灰岩(約10×20cm、厚み約10cmの割石)、H㊲:凝灰岩(約25×20cm、厚み約10cmの割石)が並列している。



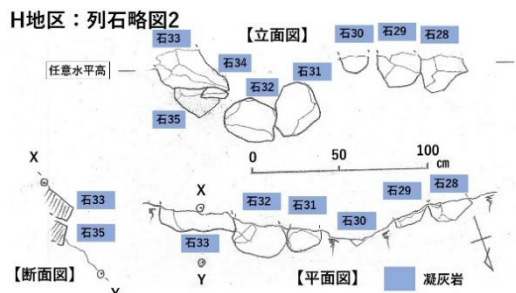
第11図 H地区写真



第12図 H,I地区写真



第13図 H地区:列石略図1



第14図 H地区:列石略図2

3. まとめと今後の課題

確認した版築については、G とH地区以外は、場所により使用した土質(黒の色調である黒褐色土や暗褐色土、阿蘇溶結凝灰岩由来の風化粘土、凝灰岩そのものなど)や積み方が異なっていた。この違いは、当然、当時の旧地形の土質(土塁築造の際に出た土)が大きく関与していると思われるが、時期差あるいは集団差であることも考えられる。また、版築が主体であるのに対して、積土での施工は何を意味するのか、その使い分けについても考えていく必要があると感じた。

版築は、列石より高い場所に築かれていることから、列石は版築土塁のための基底石であると考えられる。また、原位置を保っている列石はほぼ同レベルにある。石材は、石材環境(表層地質図では、大まかに東側が凝灰岩、西側が花崗岩地帯)に左右され、そのほとんどが阿蘇溶結凝灰岩であった。割石もあったが、角が取れた谷部から採取した礫も含まれていた。

D地区では9石(凝灰岩5、花崗岩3、石英石1:原位置を留める石は8)、E地区では6石(凝灰岩4、花崗岩2:原位置を留める石は6)、G西地区では3石(凝灰岩3:原位置を留める石は0)、G東地区では1石(凝灰岩1:原位置を留める石は0)、H地区では35石(凝灰岩33、安山岩2:原位置を留める石は19)、全体では54石(凝灰岩46【85%】、花崗岩5【9%】、安山岩2【4%】、石英岩1【2%】:原位置を留める石は33【61%】)となる。

列石のほとんどが傾斜約60度以上の危険な場所に位置しており、ロープを利用しながらの略図作成であった。列石には、崖壁面に垂直に食い込んだ状況で当時のままの原位置を留めていると考えられる石や傾いた状況の石、後日現場に行ってみると崖下に崩落している石もあった。

現地を実際に踏査し、地形と土層の堆積状況を確認した結果、土塁は、少なくとも創建当時には三枝の石垣には続いていないこと、深迫門から南に接続する土塁線は、南東側に続く尾根線には続かず、直接地区から堀切門へ続いていたのではないかと感じた。

今後は、確認した列石や版築箇所について、より精度の高い実測図の作成とこれら遺構自体に対する早急な保護対策が必要である。そして、一日でも早い特別史跡の実現を心から待ち望んでいる。

踏査及び現地確認は、坂井田端志郎氏、亀田 学氏、村崎孝宏氏、廣田静学氏、松葉孝宏氏の各氏と実施してきた。心から感謝したい。

鞠智城跡内に残存する地名

鞠智城・温故創生館 岡本 真也

1. はじめに

地名は、その由来や名付けられた時代等の検証が必要であるが、重要な歴史遺産である。鞠智城跡周辺の地名、大字、小字、一部の通称地名については、既刊の報告書等により公表されている。

今回、地元の方々及び職員等から聞き取り調査を行った結果を基に鞠智城跡周辺に残る地名(主に通称地名)について、紹介するものである。聞き取り調査は、令和元年(2019年)5月～令和4年(2022年)2月に適宜実施した。

2. 鞠智城周辺の大字(図1参照)

ヨナバル(米原)、キノ(木野)、【マツオ(松尾)、ヒエガタ(稗方)等】

3. 鞠智城周辺の小字(図1参照)

【大字米原 地内】

ウエバル(上原)、ヤシキ(屋敷)、シタノダ(シタノダ)、ヤグラ(矢倉)、トビワタル(飛渡)、チョウジャバル(長者原)、ミツエダ(三枝)、ウマワタシ(馬渡)、トウノモト(塔ノ本)、ハチクボ(八久保)、イワヅメ(岩詰)、ナガウラ(長浦)、ツツミノシタ(堤の下)、ワカミヤ(若宮)、スナサカ(砂坂)、ワクドイシ(蛙石)、ササオ(笹尾)、マサコノマエ? (政子ノ前)

【大字木野 地内】

ワクド(蛙石)、チノミネ? (地の峰)、シオイガワ(塩井川)、タテノ(立野)、コガノツジ(古閑ノ辻)、カミナガタ(上永田)、カミナノギ? (上七十帰)、チョウジャヤマ(長者山)、イケノオ(池ノ尾)、ドウノシタ(堂ノ下)、フカサコ(深迫)、ヤマダ(山田)、ホリキリ(堀切)、オオホリキリ(大堀切)、ヒノクチ(樋ノ口)

4. 聞き取り調査により判明した地名(主に通称地名)(図2参照)

※___は、話者の解説。

エダムラ、ホンムラ、ヤグラ(矢倉)、ノダ(野田)、ナカシマヤマ(中島山)、ハッセンバ(発船場)【カッセンバ(合戦場)】、ツジノヤマ(辻の山)、クスノキベラ(楠篋)、サブロウガサカ(三郎ヶ坂)、ナゴラ、カメンコ・カメノコウ(亀甲)、テジメ(手締め)、ツツミノシタ(堤の下)、ロクロマル(六郎丸)：乙丸と対峙、ショウゲンドン(少監どん)：シヨウゲンという位を持つ人の墓、オトマル(乙丸)：六郎丸と対峙、ナカグリ(中庫裏)、ナカオソノ(中尾の園)、マツリヤシキ(紀屋敷)、テラノシタ(寺の下)、イワクラサン(岩倉さん)：米原の中に7つある神様の1つ、トビワタル(飛渡)、シャカンドン・サガンドン(佐官どん)、ソウジョウヤ(惣庄屋)、セセナキ(隣溝)：田の水とせせらぎの両方の意味、タヌキノアナ(狸の穴)、ワクドイシ(蛙石)、シエゴ(●衣越)：衣を着た坊さんが越えた場所、ムカエノヤマ(迎の山)、ダゴサマシトウゲ(峠)、ダゴサマシザカ(坂)、ダイモン・ジャーモン(大門)、ヨコバタケ(横畑)、シタバル(下原)、ウエバル(上原)、キヤマヤシキ(木山屋敷)、ウエタケ(上嶽)、ロクジゾウ(六地藏)、タツホゲ(竜ほげ)、イシワリザコ(石割迫)、ホンザコ、ドウ(堂)、マトイシ(的石)、ゴジヤマ、ユビノシタ、オユビ、ホカメ、ムカエ、ホンムラ、カミ(上)、ナカ(中)、シモ(下)

5. おわりに

聞き取り調査を行った地名の中には小字も含まれるが、その多くは通称地名である。地名の由来や名付けられた時代等については、今後検証しなければならない課題であるが、池の尾門跡の北西側にある「ダイモン(ジャーモン)」、初田川の傍にある「ハッセンバ」など非常に興味深い地名が残っている。今回は、地名の由来や検証までには至れなかったが、今後、このデータを基に鞠智城跡周辺の歴史的検証が更に深まることを願っている。

最後に聞き取り調査に協力していただいた以下の方々に感謝いたします。

米原地区：萩尾浩吉氏(昭和26年8月23日生)、泉昭一氏(昭和4年2月21日生)、中原琴路氏(昭和8年12月9日生)、堀切地区：宮本清英氏(大正11年2月18日生)、中原定蔵氏(昭和4年7月22日生)、鞠智城説明ボランティア会長：片山憲政氏(昭和18年10月24日生)、熊本県立装飾古墳館副館長：上村修治氏(昭和40年10月27日生)【順不同】



図1 鞠智城周辺の大字・小字界図

鞠智城跡内に残存する西南戦争時の塹壕跡

鞠智城・温故創生館 岡本 真也

1. はじめに

国史跡鞠智城跡の指定地内に西南戦争の台場跡と考えられる遺構が存在することを知ったのは、地元の方々からの情報であった。周辺から小銃弾を拾った話なども一緒に伺った。その後、城内を散策中に、指定地内に合計8基の台場跡と考えられる遺構を確認した。

これらの遺構の記録の必要性を感じたため、所在位置を地図に落とし、写真撮影および略図の作成を行った。不十分ではあるが紹介することにした。

2. 山鹿から菊池への戦闘概要

山鹿での戦闘が開始されたのが、明治10年(1877年)2月26日。北上を目指す薩軍は、3月4日、三加和の板楠、十町周辺まで進撃をしていたにもかかわらず、「田原坂大敗」という誤報を聞き、山鹿まで撤退する。その後、官軍の援軍が南関方面から続々と押し寄せ、山鹿口の鍋田台地周辺を主戦場として戦闘状態が続く。薩軍側は4番大隊長・人斬り半次郎こと桐野利秋、官軍側は第三旅団司令長官・陸軍少将の三浦梧楼が指揮。

しかし、田原坂陥落の翌日3月21日、官軍が山鹿を占領する。薩軍は菊池隈府をはじめ各方面に撤退を開始。その後、3月30日隈府の戦が始まる。その間、南東方面へ撤退する薩軍に対して、北西方面から官軍が追う形で水島、袈裟尾などの各地で戦いを繰り返す。鞠智城が所在する山鹿市菊鹿町大字米原・木野、菊池市大字木野堀切は、水島から袈裟尾に移動する路線の上に所在する。

3. 遺構確認の経緯

○鞠智城内1号(堀切1号)遺構:菊池市堀切在住:坂本博史氏(昭和23年1月6日生)からの情報

実父の坂本兼男氏(大正8年11月25日生れ)や祖父の坂本元雄氏(明治30年生れ)から「西南戦争時、下から上がってくる兵隊を狙い撃ちするために造った穴」という言い伝えを聞いていたとのこと。

平成30年6月8日(金)、現地を案内していただく。

○鞠智城内2号(堀切2号)遺構:菊池市堀切在住:中原定蔵氏(昭和4年7月22日生)からの情報

実父の中原定治氏(明治38年生)、祖父の中原仁平氏(明治10年代生)や近所の河津新太郎氏(明治生れ)から「西南戦争時の塹壕跡で、木野神社の南側にある高まりに布陣する敵(薩軍?)と撃ち合っていた場所」「官軍は北側から攻撃して、薩軍は南側で応戦した」という言い伝えを聞いていたとのこと。

平成30年6月24日(日)、現地を案内していただく。

○鞠智城内3号(堀切3号)遺構～鞠智城内8号(米原4号)遺構

令和元年～令和3年に城内散策中に発見。

4. 遺構の状況(図1, 2, 7)

○鞠智城内1号(堀切1号)遺構(図3, 4)(官軍築造と推定)

直径約10m深さ約1mの円形状の掘り込みが確認できる。標高約123mに位置する。土盛は確認できず、武器や食料を備蓄する兵站基地的な遺構、もしくは当時の住民の避難壕跡の可能性が考えられる。

○鞠智城内2号(堀切2号)遺構(図5, 6)(官軍築造と推定)

幅約2m、長さ約20mの溝状の掘り込みが確認できる。崖の落ち際に地形に沿って土盛りをした溝が深さ約0.2～0.6mで約20m続いており、掘り込みの始点と終点も明確である。中原氏の証言では、昔はクヌギ林で深さは腰くらいまで確認できたという。3, 4号遺構に相対する位置関係にある。標高約122mに位置する。

○鞠智城内3号(堀切3号)遺構(図8, 9)(薩軍築造と推定)

長軸約6m、短軸約2.5m、深さ約0.2～0.4mの馬蹄形の掘り込みが確認できる。地形の落ち際に存在し、2号遺構に相対する位置関係にある。標高約116mに位置する。

○鞠智城内4号(堀切4号)遺構(図8, 10)(薩軍築造と推定)

長軸約12m、短軸約6.5m、深さ約0.2～0.4mで西側の地形に沿った溝及び東側に土盛を配したやや三角形の形状をした掘り込みが確認できる。北西側に旧里道が通っている。3号遺構と同様、地形の落ち際に存在している。2号遺構との距離は約20mである。標高約119mに位置する。

○鞠智城内5号(米原1号)遺構(図11, 12)(薩軍築造と推定)

長軸約10m、短軸約5m、深さ約0.2~0.4mの楕円形の掘り込みと土盛が確認できる。長者山墓地の北側、標高約151mに位置し、米原集落方面への眺望が非常に良好であり、当時の旧道が見渡せる場所に所在する。

○鞠智城内6号(米原2号)遺構(図13, 14)(薩軍築造と推定)

長軸約20.5m、短軸約5.5m、深さ約0.1~0.3mの長い溝状の土手が釣針形に確認できる。煤見(ススミ)ヶ御所の上、標高約167mに位置し、米原集落方面への眺望が非常に良好であり、当時の旧道の西側高所に所在する。

○鞠智城内7号(米原3号)遺構(図15, 16)(薩軍築造と推定)

長軸約6m、短軸約4.5m、深さ約0.1~0.2mの地形に沿ってL字状の浅い掘り込みと土盛状の高まりがわずかに確認できる。標高約164mに位置する。遺構の残存状況はあまり良くないが、当時の旧道より高所に所在する。

○鞠智城内8号(米原4号)遺構(図17, 18)(薩軍築造と推定)

長軸約8.5m、短軸約5.5m、深さ約0.2~0.4mの馬蹄形を呈する掘り込みと土盛を確認した。シャカンドンの南側の高まり、標高約168mに位置する。遺構の残存状況は非常に良く、米原1号~3号遺構と同様、山鹿方面から追撃してくる官軍を狙撃するための薩軍が築造した台場と考えられる。

5. 遺物の状況

泉昭一氏(昭和4年2月21日生れ)から幼少の頃、米原集落内で小銃弾を1個採集された事、中原定蔵氏(昭和4年7月22日生れ)から幼少の頃友人が堀切地内で小銃弾を採集された事、また、堀切在住者から約20~30年前まで袈裟尾にあった大きな枯木に小銃弾が食い込んでいたという話を伺った。

いずれも人差し指の先端程の大きさだったとの証言から西南戦争時の小銃弾(スナイドル銃弾、エンフィールド銃弾等)と考えられる。

6. 文献による記録

明治10年3月30日、薩軍及び官軍の記録にも鞠智城跡周辺での戦闘の様子が記述されている。

◆薩南血涙史(加治木常樹を中心とする薩軍側の生存者同士が陣中日記・実話や口伝などを基に戦記をまとめた数少ない貴重な記録。西南戦争35周年を記念して明治45年・大正元年(1912年)に刊行。)

【限府の戦(明治10年3月30日)の中の記述】

○…袈裟尾原の地たる廣闊にして、守兵寡く、壘間空疎百歩或は二百歩を隔てて壘を築き、守兵僅かに三名或は四名を散布して之を守れり、…

○永井隊(貴島隊○番)は袈裟尾村山鹿間道を守りしが、官軍襲撃甚だ急にして之と激戦多数の死傷者を出し、殆んど支ゆる能はず将に守りを棄てて退き走らんとす、…

◆征西戦記稿(明治22年(1889年)に明治政府の参謀本部陸軍部編纂課が編集し、陸軍文庫より刊行された全四巻の書籍。明治10年の西南戦争に関して、その発端から終結にいたるまでの全般の戦闘状況および日表・名簿・統計書など、あらゆる事項が詳細に記録され、まとめられている。)

【山鹿戦記(明治10年3月30日)の中の記述】

○…賊等壘壁を高塚村米原村の台及び本道と限府市街の西端少距離の処に築き防守す…

○…其中央左翼の兵も奮進して高塚米原台の壘壁を抜く…

これらの文献より、明治10年(1877年)3月30日、薩軍(西郷軍)が山鹿から菊池へと敗走し、官軍(政府軍)が追走する際に築かれた塹壕や陣地の痕跡ではないかと考えられる。いずれの遺構も旧道・旧間道沿いの高台に位置している。

7. まとめと今後の課題

鞠智城跡で発見された台場跡遺構は、西南戦争時、明治10年3月30日前後の戦で、山鹿から菊池へ戦場が移動する際に、撤退する薩軍、追撃する官軍が築造した台場跡(薩軍:鞠智城内3号~8号、官軍:同2号)であると考えられる。しかし、鞠智城内1号(堀切1号)遺構は官軍が築造した簡易な陣地もしくは当時の住民の避難壕であった可能性が高い。

今後、これらの遺構及び地形の厳密な実測図の作成、金属探知機を使用した調査を通して薬莖、雷管や小銃弾などの遺物の詳細分布調査、周辺地域での更なる聞き取り調査や文献調査などを通して、より精度の高い

記録保存が望まれる。

最後に現地を案内していただいた泉昭一氏、中原定蔵氏、坂本博史氏、現地での指導をいただいた高橋信武氏、調査にご協力いただいた美濃口雅朗氏には深く感謝申し上げます。

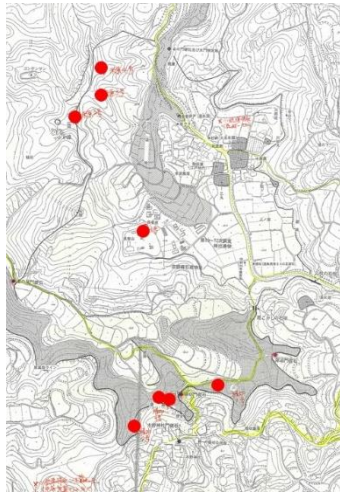


図1 鞠智城内の台場跡位置図

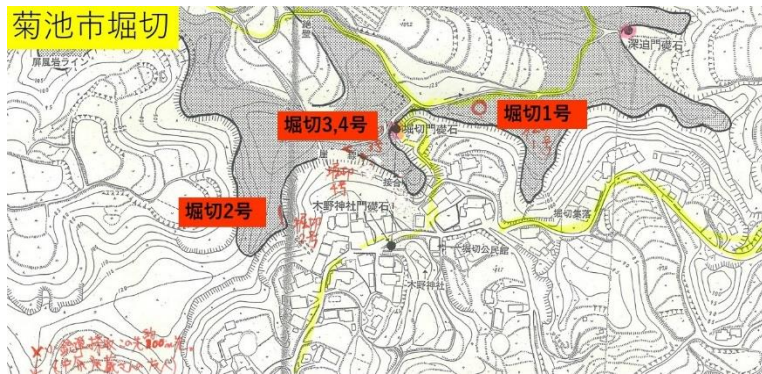
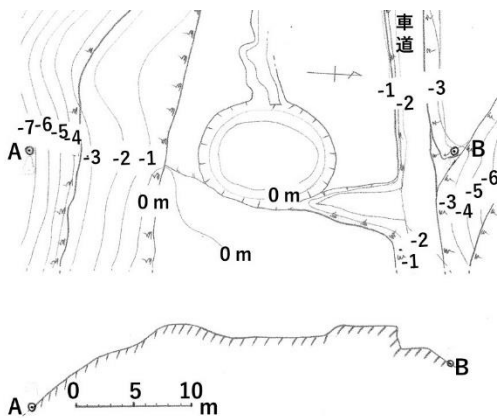


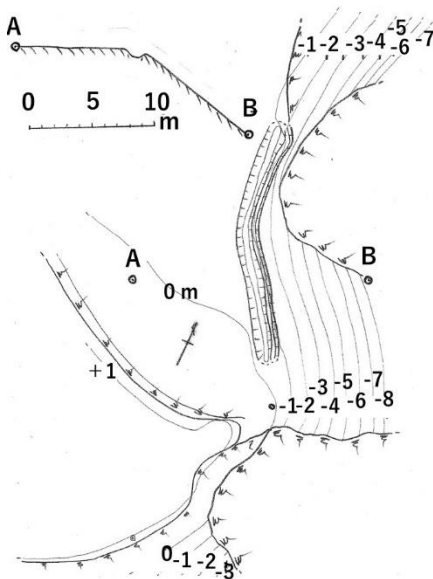
図2 堀切地区の台場跡位置図



第3図 鞠智城内1号(堀切1号)略図



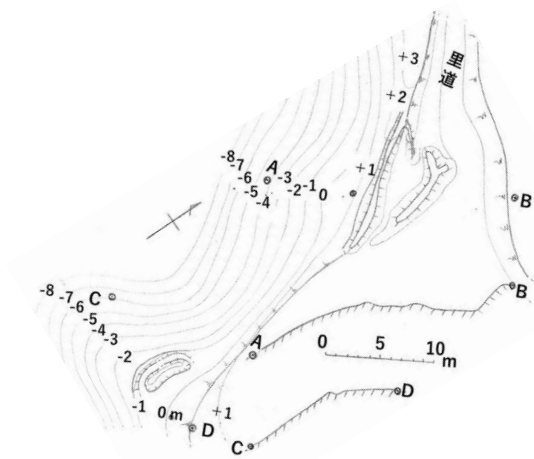
第4図 鞠智城内1号(堀切1号)近景(東より)



第5図 鞠智城内2号(堀切2号)略図



第6図 鞠智城内2号(堀切2号)近景(北より)



第7図 鞠智城内3号、4号(堀切3号、4号)略図



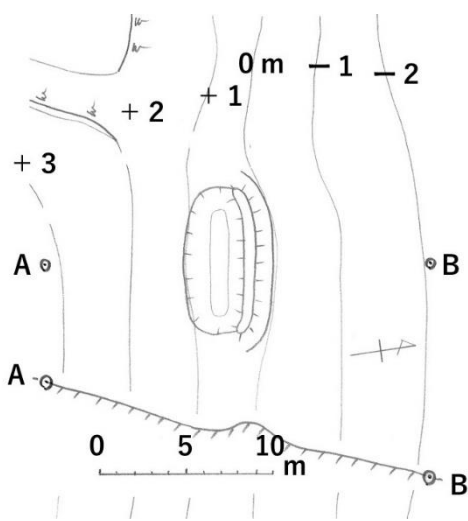
第8図 鞠智城内3号(堀切3号)近景(南より)



第9図 鞠智城内4号(堀切4号)近景(南東より)



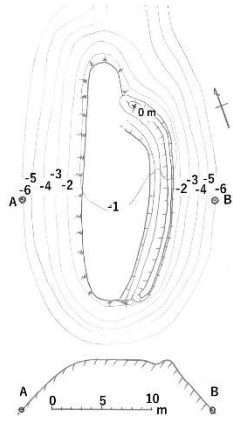
図10 米原地区の台場跡位置図



第11図 鞠智城内5号(米原1号)略図



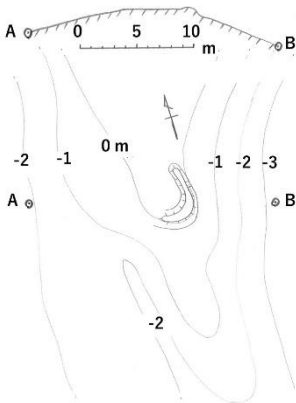
第12図 鞠智城内5号(米原1号)近景(西より)



第13図 鞠智城内6号(米原2号)略図



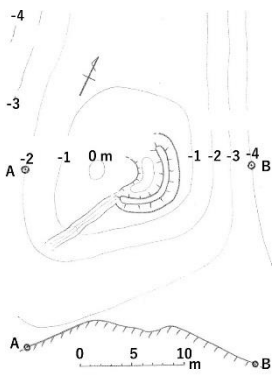
第14図 鞠智城内6号(米原2号)近景(南西より)



第15図 鞠智城内7号(米原3号)略図



第16図 鞠智城内7号(米原3号)近景(北より)



第17図 鞠智城内8号(米原4号)略図



第18図 鞠智城内8号(米原4号)近景(北西より)



図19 堀切地区の塹壕遠景(左右の稜線上)北西より



図20 米原地区の塹壕遠景(左右の稜線上)南東より

バケツを使用した古代米栽培の試み

装飾古墳館 牛島 克彦

1 はじめに

赤米体験教室は、当館の開館当初から地元赤米生産クラブの皆様のご協力をいただきながら、実施してきた体験教室である。

令和2年度から、「バケツで育む古代米」と内容を一新し、参加者に古代米づくりを身近に感じてもらいたいという願いから、当館の敷地においてバケツに苗を植え、赤米、黒米を栽培することとした。

この体験活動は、米づくりに係る「田植え」、「稲刈り」、「もちつき」を1セットとして提供する。各回の活動では、古代米栽培に関する体験だけでなく、収穫のための石包丁を作ったり、まいぎりで火を起し、竹筒を使用してお米を炊いたりする活動も行い、古代人の生活の営みを体感する内容も工夫した。

2 バケツでの古代米栽培について

(1) 令和2年度の取組

① 苗づくり

赤米生産クラブの指導の下に、種もみの消毒を行い、発芽したものを市販の育苗箱にまき、コンテナに入れた。水管理のためにコンテナ内に水を入れて育苗箱を浸した。水面が育苗箱より高くないように、コンテナ側面に穴をあけて水ぬきを工夫した。

発芽率も高く、苗は順調に生長した。赤米の苗は、背が高く茎が細い。黒米の苗は、赤米より低い茎は太い。

② 土づくり

10Lのバケツが64個となると、土も相当な量になる。そこで、地元農家の方に許可をいただき、水田の土をいただいた。土には、肥料を混ぜて水を入れ、攪拌して1日置くと水田のような土の状態になる。バケツとはいえ、「しろかき」をしなければいけないことが分かった。

③ 田植え

育苗箱から苗を分けて参加者に配布した。1～2か所に苗を植えるように指示をしたが、職員も参加者も無事に苗が生長するのか、収量は十分に確保できるのか不安であったため、苗を植える箇所が多くなった。

台車1台に18個設置した。合計3台と予備のバケツを路地に設置して生育することにした。

④ 稲の生長過程

ア 苗の生長

苗の生長は早く、田植えから2週間ほどで50cmに達した。周りの水田を見てもバケツ稲の生長が早いので喜んでしたが、伸びすぎて葉が垂れ下がってきたので、赤米生産クラブの立山会長に助言をいただくことにした。立山会長の見立てでは、肥料の分量が多すぎたために、茎や葉が伸びすぎているとのことだった。

イ 水の管理

バケツは、台車に54個、路地に10個設置したの



プラ箱に穴をあける



水田から土を入れる



伸びすぎた苗（右が黒米）

で、水の管理が1つの課題であった。そこで、バケツの上にホースを取り回し、バケツの位置に穴をあけて蛇口をひねると水が出るようにした。夏場になると、水がすぐに干上がり、日中に2～3回の給水が必要であった。バケツ1個ずつに水まきをしないでよい設備を制作したとはいえ、台車1台ずつホースをつなぎ直して給水することや、ホースの穴が詰まって水が出なくなることなど、水まき作業に時間がかかり、職員の負担増となった。水まき作業は絶対に必要な作業であるため、今後更なる工夫が必要である。



バケツの上にホースを設置

ウ 病害虫への対応

赤米生産クラブの立山会長から病害虫について助言をいただいていた。しかし、ウンカ対策の消毒時期が遅くなり、ウンカ被害が発生した。稲が密集していたことも発生の一因となった。ウンカは茎にとりついて吸うので、茎が茶色に変色してやせ細り、稲は一段と自立することが難しくなった。いただいた消毒液をペットボトルに入れて噴霧したが、一度発生したウンカを駆除することは難しかった。

また、稲穂が白くなりもみが生長しない「白穂」のような症状が発生した。文献では気温の変化が要因と書かれていたが、台風対策で体験棟内へ移動させた時期に見られた。気温の変化が著しく起きたわけではなく、原因は不明である。日照条件なども含めて環境の変化が影響したのではないだろうか。

エ その他

周辺のうるち米より遅く田植えしたことも影響したが、赤米の出穂は8月日ごろだった。

また、黒米は赤米よりさらに遅く、8月日ごろだった。赤米は出穂した頃が最も赤く、穂が出そろった時期は、とても美しい。黒米のもみは緑色で、熟すにつれてやや黒っぽくなる。

⑤ 稲刈り

参加者は、石包丁を使用して穂の部分刈り取った。黒米は、まだ刈り取れる状態ではなかったため、赤米のみの稲刈りとなった。黒米は後日職員で稲刈りして、かけ干した。赤米も穂の部分をしぼらく乾燥させた後、脱穀の作業を実施した。

⑥ 脱穀・籾摺り・精米

脱穀は、赤米生産クラブ員の方が所有されていた足踏み脱穀機を借用した。バケツ稲の量は少なすぎて、機械(コンバイン)などを利用できない。うるち米と混ぜるといけないので、専用の機器を持つ必要もある。そのため、昔ながらの足踏み脱穀機を使用した。石包丁で穂だけ刈り取ったものは、足踏み脱穀機も使用できないので、1本ずつ手で取り外すこととなり、バケツ稲の量でも1日かかった。



足踏み脱穀機の様子

籾摺り、精米も生産クラブで使用された機械を古墳館に運んで行った。籾摺りも量が少ないとうまく作業ができないとのことで、手作業でもみ殻を取り除いた。また、赤米と黒米を同じ機械で作業するため、取り除けなかったものが混ざり合い、これも手作業で選り分けたので、かなりの時間を費やした。

⑦ 餅つき

餅つきでは、購入した赤米と黒米を使用した。参加者には成果品として精米した赤米と黒米を20gずつ渡すことができた。古代米の混ぜたつきたてのもちをぜんざいに入れて試食した。大好評であった。

(2) 令和2年度の成果(○)と課題(▲)

○これまで水田で実施していた古代米づくりが、バケツでも米づくりに関連する体験教室を行

えることが実証できた。

○田植え・稲刈りの体験に、石包丁づくりや古代食の体験教室を関連付けて行い、体験教室の精選と学習の深まりを持たせることができた。

▲苗を複数箇所植えると分けつが増えず、結果としてバケツの中心に1か所植えることと収穫量は変わらない。さらに1か所植えた苗の茎が太く、株が大きくなるのでしっかりした稲になる。

▲株間が狭いとウンカが発生しやすくなるので、バケツは台車の中心には置かず、12個とする。

▲肥料は少なめに与える。

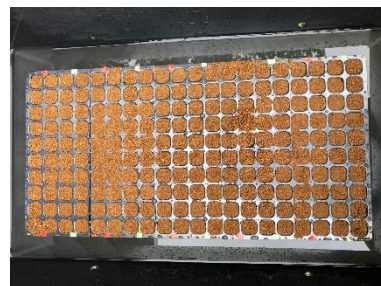
▲水の管理が負担になる。水やりの設備を工夫する。

▲収穫量を増やす工夫が必要である。

(3) 令和3年度の取組

① 苗づくり

田植えの際に苗の本数を統一できるように、ポット型のプラグトレイを育苗箱として使用した。1ポットに2粒の種もみをまいて発芽させた。トレイは切り分け、参加者に配付しやすいように準備した。今年度は、発芽率が低く、まいた種もみの数も少なかったため、発芽した苗が少なかった。



プラグトレイの苗床

② 土づくり

昨年度同様、地元農家から提供を受けて、水田の土をバケツに入れた。小学校での活動も呼びかけたため、130個のバケツに土を入れた。



田植の様子（個別に対応）

③ 田植え

株間を確保し、苗の分けつを促進させるために、バケツ中央に1か所のみ田植えするようにした。台車には12個のせ、中央部分を空けた。ポットでの苗づくりが効果的で、参加者も植える苗の分量が分かりやすかったようである。

④ 稲の生長過程

ア 苗の生長

肥料は少なく与えたので、昨年度のように急激な伸びはなかった。分けつも順調で、株分かれが多く、太い茎の苗が育った。倒れる心配もなかった。ただし、苗が不足して追加して育った分の田植えが遅くなったため、先に植えた苗との差が生じた。

イ 水の管理

気温が高くなる7月以降は、急激にバケツの水が減少する。バケツ1つに1回2L程度の給水が、1日に2～3回必要となる。

台車に60個のバケツを管理しており、1つ1つに手作業で給水することは重労働である。そこで、穴をあけたホースをバケツの上に置いて蛇口につなぎ、栓を開ければ各バケツに給水できるよう工夫した。今年度は、さらに給水用タイマーを設置して、指定した時間に給水できるように改善した。



水やりタイマーの設置

ウ 病害虫の発生

株間を広げることが功を奏したのか、ウンカの発生

は見られなかった。一般的なウンカ発生時期の前に、農薬散布を行って予防したこともよかったと思われる。

今年度も白穂は発生したが、多くはなかった。台風対策での移動も少なかったことが要因だろうか、原因は不明である。

エ その他

バケツに入れた土からカブトエビが誕生して水中を泳ぎ回っていた。ホウネンエビもよく見られた。またオタマジャクシが見られるようになり、バケツ稲が水田のような環境になっており、生物の生活環境に一役買っていることが分かった。



動き回るので濁っている

⑤ 稲刈り・脱穀・精米

赤米と黒米の生長に差があり、予定していた期日に稲刈りを行うことができなかった。昨年同様、黒米は職員で刈り取り、かけ干した。

小学校で刈り取られた米を集めて脱穀したが、穂先を刈り取っているため、すべて手作業での脱穀となった。職員負担軽減のために、小学校の学習の中で脱穀まで実施できるプログラムとして提案する必要がある。

昨年度は、参加者の自宅水田で栽培した古代米やこれまで実施していた水田に自生した古代米も収穫していたため、今年度は収穫量が大幅に減少する予定であった。収穫量は減少したものの、機器を使用して籾摺り・精米を行うことができ、参加者へ成果品を配付することができた。

(4) 令和3年度の成果(○)と課題(▲)

○育苗にプラグトレイを利用し、バケツの中心に田植えを実施したことが、稲の生長に効果的であり、参加者が田植えを行う時も分かりやすかった。台車に載せるバケツの数を減らしたことも、稲の生長に効果的であった。

○水やりタイマーを活用したことで、水の管理の負担が軽減された。

○小学校でのバケツ稲栽培を実施したことは、子どもたちが古代米栽培を身近で観察でき、収穫の喜びを味わわせる取組となった。また、古代米栽培全体の収穫量を増加させる一因ともなり有用であった。

▲水やりタイマーの時間設定が2回しかできず、気温の高い7、8月はバケツの水が干上がる状況が生じた。

▲ホース内に藻類が発生し、散水させるためにホース側面に開けた穴に詰まり、適切に給水できないことがあった。

▲台車に載せるバケツの数を減らしたために、台車を増やす必要があり、製作に時間を費やした。

▲バケツの土は、地元農家の方から無償提供していただいているが、今年度130個のバケツに土を入れて運搬することとなり、重労働となった。

▲今年度も稲刈りの期日に黒米が間に合わなかった。田植えの時期が遅くなったことが要因だと思うが、赤米と黒米の出穂の時期が1週間ほど違うので、対策が必要である。

3 おわりに

古代米栽培の取組は、古墳館開館当初からの体験教室プログラムであり、地元生産クラブをはじめ、様々な方が関りを持って受け継がれてきたものである。水田で泥にまみれて田植えをしたり稲穂を刈り取ったりする活動には及ばないが、バケツを水田の代わりとする古代米栽培が、古墳館職員の手で実施できることが確認できた。水田の活動と比較して不足する部分を、石包丁作りや竹ご飯づくりなどを組み合わせる工夫で補いながら、充実した体験プログラムとなるように、今後研究開発を続けていきたい。

研究紀要 第 15 集

編集・発行 熊本県立装飾古墳館
〒861-0561
熊本県山鹿市鹿央町岩原3085番地
電話 0968-36-2151(代)
fax 0968-36-2120
発行日 令和4年(2022年)3月31日

発行者:熊本県立装飾古墳館

所属:教育庁教育総務局文化課

発行年度:令和3年度(2021年度)